

(別表第1)

サービス評価結果表

サービス評価項目

(評価項目の構成)

I. その人らしい暮らしを支える

(1) ケアマネジメント

(2) 日々の支援

(3) 生活環境づくり

(4) 健康を維持するための支援

II. 家族との支え合い

III. 地域との支え合い

IV. より良い支援を行うための運営体制

ホップ 職員みんなで自己評価!
 ステップ 外部評価でブラッシュアップ!!
 シャンプ 評価の公表で取組み内容をPR!!!

ーサービス向上への3ステップー

【外部評価実施評価機関】※評価機関記入

評価機関名	社会福祉法人 愛媛県社会福祉協議会
所在地	愛媛県松山市持田町3丁目8番15号
訪問調査日	令和 4 年 10 月 19 日

【アンケート協力数】※評価機関記入

家族アンケート	(回答数) 11名	(依頼数) 18名
地域アンケート回答数	9名	

※事業所記入

事業所番号	3890300126
事業所名	グループホームしおり
(ユニット名)	風
記入者(管理者)	
氏名	松岡 加代
自己評価作成日	令和 4 年 9 月 9 日

(別表第1の2)

<p>【事業所理念】 ・共に生きる 【ユニット理念】 一人ひとりに寄り添い、観察力を身に 着け洞察力を養う。(日頃のケアの中 で、利用者様お一人おひとりの小さな 変化に気づくことのできるユニットを 目指す)</p>	<p>【前回の目標達成計画で取り組んだこと・その結果】 【取り組み】 ①運営推進会議や広報誌を活用し、避難訓練、救命救急講習会の実施や、避難・災害時の事業所の在り方等の情報を発信する。 ②地域の防災訓練に参加し、消防団や地域の方との情報交換を行い、事業所を知っていただく。 ③消防団や地域の方に運営推進会議への参加の誘いを働きかける。 【結果】 ①コロナ前までは、毎年AEDの使い方や救命救急の講習を受けていたが、感染予防の為、一昨年から、講習の実施は出来ていない。又、災害時の事業所の在り方として、当事業所を避難場所として提供している事業は、地域の方たちへは周知して頂いている。 ②地域の情報伝達訓練に参加したが情報交換は出来ていない。 ③コロナ感染が流行していた2年間は、運営推進会議は資料を送付し、地域の方、消防団にも目を通していただき、意見や要望を頂いていた。今後は会議にも参加して頂く方向で、働きかけていきたい。</p>	<p>【今回、外部評価で確認した事業所の特徴】 事業所の敷地は広く、度には芝生が植えられ、玉ねぎや芋などの野菜を育てる畑も整備されている。敷地内には、2つのグループホームが建てられ、渡り廊下で利用者が行き来できるようになっている。事業所は高台にあり、宇和島城などの眺めや市内の絶景を一望することができる。約1年半前に、法人内の人事異動により、新たな管理者に交代している。コロナ禍において、制限が設けられ、外出支援が思うようできない状況に、利用者から「実家に帰りたい、家族に会いたい」などの要望が出されるものの、希望を叶えることができない状況に、管理者は心を痛めている。また、職員は利用者と家族の希望を叶えるために、写真のみの送付に留まらず、誕生日の月などには動画をDVDに保存して家族に送付するなど、家族との交流を継続させながら、利用者の近況が伝わりやすく伝える工夫をしている。さらに、事業所では、利用者にメリハリのある生活支援に力を入れており、日中や夜間に着替えなどが行われている。近隣には、小学校や保育園があり、玉ねぎや芋ほりの野菜を利用者に収穫するなどの交流を継続することができている。加えて、令和4年の春には、地域住民を対象とした「認知症サポーター養成講座」を地区社協と共同開催するなど、地域に根付いた事業所となっている。</p>
---	---	---

評価結果表

【実施状況の評価】

◎よくできている ○ほぼできている △時々できている ×ほとんどできていない

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
I.その人らしい暮らしを支える									
(1)ケアマネジメント									
1	思いや暮らし方の希望、意向の把握	a	利用者一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。	○	会話の中から思いや要望を引き出しながら、把握に努めている。	◎	/	◎	入居時に、管理者等は利用者から思いや意向を聞くよう努めている。利用者の高齢化や重度化に伴い、意向の把握が難しくなっているが、職員は日常的な会話や以前話していた内容から、思いなどをくみ取った支援をしている。また、職員は支援中の利用者の表情やしぐさを観察するほか、面会に訪れた家族から意向を聞くこともある。
		b	把握が困難な場合や不確かな場合は、「本人はどうか」という視点で検討している。	○	意思の疎通が図れず、把握が困難な方は、表情や態度などから把握するよう努めている。	/	/	/	
		c	職員だけでなく、本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)とともに、「本人の思い」について話し合っている。	○	ケアプランの見直しや、更新の時に家族に電話にて、本人の思いについても話し合っている。	/	/	/	
		d	本人の暮らし方への思いを整理し、共有化するための記録をしている。	○	24Hシートに記録し、共有している。	/	/	/	
		e	職員の思い込みや決めつけにより、本人の思いを見落とさないように留意している。	○	思いを伺い、申し送り等で他の職員と共有し思いが叶うよう努めている。	/	/	/	
2	これまでの暮らしや現状の把握	a	利用者一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、こだわりや大切にしてきたこと、生活環境、これまでのサービス利用の経過等、本人や本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)から聞いている。	○	入所時家族や、ケアマネジャーから情報を得、アセスメントシートに落とし、職員全体で共有している。	/	/	○	入居前に、管理者等は自宅や病院などを訪問し、利用者や家族から、生活歴や馴染みの暮らし方などを聞く事前調査を行うとともに、把握した情報はアセスメントシートに記録している。また、在宅から利用者が入居する場合には、以前利用していた介護サービス事業所や介護支援専門員から情報提供を受けることもある。さらに、入居時に、家族や知人から、新たな情報の聞き取りをしている。
		b	利用者一人ひとりの心身の状態(身体面・精神面)や有する力(わかること・できること・できそうなこと等)等の現状の把握に努めている。	○	家事の手伝いや、掲示物の作成等、できる所はやって頂き、手伝うことができる事を増やしていくよう努めている。	/	/	/	
		c	利用者一人ひとりの一日の過ごし方や24時間の生活の流れ・リズム等、日々の変化や違いについて把握に務めている。(生活環境・職員のかかわり等)	○	24Hシートに時系列で細かく記入し、把握に努めている。	/	/	/	
3	チームで行うアセスメント(※チームとは、職員のみならず本人・家族・本人をよく知る関係者等を含む)	a	把握した情報をもとに、本人が何を求め必要としているのかを本人の視点で検討している。	○	月1回のユニット会でモニタリングを通して検討している。	/	/	○	入居時には、事前に収集したアセスメント情報をもとに、職員間でカンファレンスを行い、より良いサービスを検討している。入居後も、定期的に利用者が何を求め必要としているのかなどを、利用者本人の意向をくみ取る視点で検討をしている。また、法人・事業所として、美化や行事、看護、防災、リスク、広報の委員会が設けられ、様々な視点で、サービスの質の向上に向けた話し合いが行われている。
		b	検討した内容に基づき、本人がより良く暮らすための課題の把握に努めている。	○	ユニット会で出た課題について、全員が共有できるよう記録し、課題の把握に努めている。	/	/	/	
4	チームでつくる本人がより良く暮らすための介護計画	a	本人の思いや意向、暮らし方が反映された内容になっている。	○	担当者が本人の意向を伺い、それに沿ったケアプランを立てている。	/	/	/	毎年のシルバー月間には、職員は利用者から、「元気でのおんびり過ごしたい、孫にコロケとちゃんぽんを作ってやりたい、家族のお墓参りに行きたい、旅行に行きたい」などの思いや意向を聞き、計画に反映して、実現できるように努めている。また、事前のアセスメントやモニタリングの情報をともに、利用者や家族、関係者から出された意見を踏まえて、家族や職員を交えて話し合い、計画作成担当者が介護計画を作成している。「今まで通りでいいです」などの家族の意見が増え、意見は出されにくくなっている。
		b	本人がより良く暮らすための課題や日々のケアのあり方について、本人、家族等、その他関係者等と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映して作成している。	△	本人からの意向を踏まえ、家族にも伝え、意見やアイデアを頂き、反映する場合もあるが、コロナのため面会もできず、最近では意見やアイデアを頂く事があまりない。	◎	/	○	
		c	重度の利用者に対して、その人が慣れ親しんだ暮らし方や日々の過ごし方ができる内容となっている。	△	本人の思いが聞けない場合は、表情や態度から把握するようになっている。	/	/	/	
		d	本人の支え手として家族等や地域の人たちとの協力体制等が盛り込まれた内容になっている。	×	コロナ禍の為、地域との協力体制はできていない。	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
5	介護計画に基づいた日々の支援	a	利用者一人ひとりの介護計画の内容を把握・理解し、職員間で共有している。	○	毎日ケアプランに沿って支援できるよう、個人ファイルにプランを貼付し、チェックをしている。	/	/	/	○ 介護計画の内容は、利用者一人ひとりの個別ファイルに分かりやすく添付され、職員は毎日の記録時に、目標やサービス内容を確認できるようになっている。また、計画の支援内容に沿って、担当職員が要約書を作成するとともに、月1回実施するユニット会の中で、利用者の日々の支援内容や実施状況などの確認を行い、課題などを検討している。さらに、24時間支援記録を活用して、利用者の言動などが詳細に記載されている。
		b	介護計画にそってケアが実践できたか、その結果どうだったかを個別具体的に記録して職員間で状況確認を行うとともに、日々の支援につなげている。	○	担当者がモニタリングの記録を、ユニット会で報告し、経過や結果を、職員全員で共有して次の支援に繋げている。	/	/	/	
6	現状に即した介護計画の見直し	a	介護計画の期間に応じて見直しを行っている。	◎	半年に1回、見直しを行っている。また、体調の変化があり、支援内容の見直しが必要な時は、期間は関係なく見直しをしている。	/	/	/	◎ 入居後は、1か月で介護計画の見直しをするほか、以降は、介護計画の認定期間に合わせて、6か月に1回計画の見直しをしている。各利用者の担当職員が、利用者の現状を確認して、モニタリングを行うとともに、毎月実施するユニット会の中で、モニタリングの結果の報告し、職員間で情報を共有している。また、利用者の状態の変化が見られた場合には、家族や医療関係者に相談するとともに、職員間でカンファレンスを行い、新たな介護計画を作成している。
		b	新たな要望や変化がみられない場合も、月1回程度は現状確認を行っている。	◎	月1回のユニット会で全体の現状維持確認を行っている。	/	/	/	
		c	本人の心身状態や暮らしの状態に変化が生じた場合は、随時本人、家族等、その他関係者等と見直しを行い、現状に即した新たな計画を作成している。	○	体調や、暮らしの状態に変化が生じた場合は、家族にも相談し、現状に即した介護計画に作り変えている。	/	/	/	
7	チームケアのための会議	a	チームとしてケアを行う上での課題を解決するため、定期的、あるいは緊急案件がある場合にはその都度会議を開催している。	○	毎月1回ユニット会を開催し、緊急時にはカンファレンスを行っている。	/	/	/	◎ 事業所全体で、毎月ミーティングを開催して、業務や行事などの情報共有を行うとともに、その後に分かれてユニット会を実施し、利用者のモニタリングや評価のほか、職員間で意見交換をしている。会議に参加しやすいように、事前に日程調整を行い、18時30分から、2時間程度の会議を実施するとともに、勤務以外の職員には手当を支給するなど、参加しやすいよう工夫されている。また、緊急案件のある場合には、法人の代表者や施設長、管理者に報告するとともに、その日の出勤職員を交えて話し合いをしている。参加できない職員には口頭で報告するほか、会議録を確認してもらうとともに、確認後には押印をしている。さらに、会議録の押印の有無の確認は主任が行い、全ての職員の押印が整った場合にはファイルに綴るなど、確実な情報伝達や共有に繋げている。
		b	会議は、お互いの情報や気づき、考え方や気持ちを率直に話し合い、活発な意見交換ができるよう雰囲気や場づくりを工夫している。	○	職員一人一人が意見を出せるような雰囲気作りができています。意見に対しては否定はせず、前向きに意見交換できている。	/	/	/	
		c	会議は、全ての職員を参加対象とし、可能な限り多くの職員が参加できるよう開催日時や場所等、工夫するとともに、参加できない職員にも内容を正確に共有している。	○	月1回の会議には都合上参加できない職員もいるが、正規職員は殆ど参加できている。参加できなかった職員は、議事録を確認し、内容を把握している。	/	/	/	
8	確実な申し送り、情報伝達		日々の申し送りや情報伝達を行い、重要な情報は全ての職員に伝わるようにしている。(利用者の様子・支援に関する情報・家族とのやり取り・業務連絡等)	◎	日誌、連絡ノート、申し送りで伝えている。	/	/	/	○ 日々の申し送り時は、日誌のほか、重要事項を記載した連絡ノート、24時間シートを活用して、職員間で伝達をしている。
(2) 日々の支援									
9	利用者一人ひとりの思い、意向を大切に支援	a	利用者一人ひとりの「その日したいこと」を把握し、それを叶える努力を行っている。	△	業務多忙により、限られた人数のみになってしまっている。同じパターンを繰り返す状況になっている。	/	/	/	◎ 職員は「散歩に行きませんか、花を見に行きませんか」など、着替えや散歩の誘い方などの工夫した声かけを行い、利用者自身で意思決定できるよう支援している。また、職員は利用者のできることや得意なことを把握して、裁縫が得意な利用者には、職員からボタン付けや雑巾縫いをお願いすることもあり、手伝ってもらった場合には感謝の言葉を伝えている。さらに、天気の良い日には、お弁当を作って利用者と一緒に庭で食べるなど、笑顔で生き生きとした楽しみのある生活が送れるよう支援している。
		b	利用者が日々の暮らしの様々な場面で自己決定する機会や場をつくらせている。(選んでもらう機会や場をつくる、選ぶのを待っている等)	○	朝提供する飲み物や、入浴の時間など、選んでもらう場をつくっている。	/	/	/	
		c	職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースや習慣を大切に支援を行っている。(起床・就寝、食事・排泄・入浴等の時間やタイミング・長さ等)	△	一人ひとりのペースや生活習慣を大切にしているが、共同生活で、どうしても職員側の都合に合わせてしまう時がある。	/	/	/	
		d	利用者の活き活きした言動や表情(喜び・楽しみ・うるおい等)を引き出す言葉がけや雰囲気づくりをしている。	○	笑顔と、明るい声掛けでコミュニケーションを取るよう心がけている。挨拶もきちんと顔を見て、目を合わせ行っている。	/	/	/	
		e	意思疎通が困難で、本人の思いや意向がつかめない場合でも、表情や全身での反応を注意深くキャッチしながら、本人の意向にそった暮らし方ができるよう支援している。	○	日頃のかかわりの中で、表情や言動から意向をつかむよう努めている。	/	/	/	
10	一人ひとりの誇りやプライバシーを尊重した関わり	a	職員は、「人権」や「尊厳」とは何かを学び、利用者の誇りやプライバシーを大切に言葉かけや態度等について、常に意識して行動している。(人前であからさまな介護や誘導の声かけをしないよう配慮、目立たずさりげない言葉かけや対応等)	○	人権や、尊厳についてミーティング等で上司から話があったり、諸先輩からの指導もあり、常日頃から意識しており、さりげない言葉かけや、対応に努めている。	/	/	/	◎ 職員は、人権や尊厳などを研修で学び、利用者の誇りやプライバシーを大切に言葉かけや態度などを理解して、実践している。特に、排泄には気を配り、もぞもぞしたり、立ち上がろうとしたりする利用者には、職員が羞恥心などに配慮して、さりげないトイレ誘導をしている。中には、歩行器を使用せずに歩いている利用者にも、「ちょっと待って、歩行器使って」などと大きな声を出したり、素手で食事を摂っていた利用者にも、「それはダメ」などと、叱咤に大きな声を出してしまう職員も見られ、管理者等は該当職員に注意喚起をしている。また、居室に入る場合には、職員が利用者に声をかけて入室するとともに、不在時にも、必ず事前に許可を得た上で入室することができる。
		b	職員は、排泄時や入浴時には、不安や羞恥心、プライバシー等に配慮しながら介助を行っている。	○	失禁を確認した場合や、トイレで失敗した場合など、さりげなくトイレに誘導したり、入浴の際はタオルで体を隠しながら不安や羞恥心を感じないように配慮している。	/	/	/	
		c	職員は、居室は利用者専用の場所であり、プライバシーの場所であることを理解し、居室への出入りなど十分配慮しながら行っている。	○	訪室した際は、ノックをしたり声掛けをして入室している。	/	/	/	
		d	職員は、利用者のプライバシーの保護や個人情報漏えい防止等について理解し、遵守している。	◎	職員は全員個人情報漏えい防止について理解しており、第三者には漏らすことはない。	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
11	ともに過ごし、支え合う関係	a	職員は、利用者を介護される一方の立場におかず、利用者に助けてもらったり教えてもらったり、互いに感謝し合うなどの関係性を築いている。	◎	共同生活の中で、家事などできる事は手伝っていただき、感謝の言葉を伝えている。若い職員は、編み物など教えて頂く場面もあり、互いに関係性を築いている。	/	/	/	新たに利用者が入居した場合には、世話好きで話しかけてくれる他の利用者にも、職員が「お願いしますね」などと声をかけ、利用者同士の仲を取り持つ支援に努めている。また、職員は利用者同士の関係性を把握して、配席を考慮するなどの対応を行い、トラブルが起こらないよう支援している。さらに、仲の良い、性格の似た利用者同士と一緒に過ごせるように座席を配慮するとともに、職員は様子の見守りをしている。
		b	職員は、利用者同士がともに助け合い、支え合って暮らしていくことの大切さを理解している。	○	職員は利用者同士が一つの家族となり、できない部分を担ったり、支えあって暮らしていくことの大切さを理解し、そのように声掛けをしている。	/	/	/	
		c	職員は、利用者同士の関係を把握し、トラブルになったり孤立したりしないよう、利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている。(仲の良い利用者同士が過ごせる配慮をする、孤立しがちな利用者が交わる機会を作る、世話役の利用者にうまく力を発揮してもらう場面をつくる等)。	○	利用者同士の関係性の把握に努めている。トラブルにならないよう座席の位置を決めたり、仲の良い利用者がゆっくり話ができるよう、くつろげるスペースを作るなど配慮している。しかし、強い難聴のある利用者は孤立してしまう場合もある。	/	/	○	
		d	利用者同士のトラブルに対して、必要な場合にはその解消に努め、当事者や他の利用者に不安や支障を生じさせないようにしている。	○	それぞれの利用者にも場所を変えて話を聞き、他の利用者にも支障が出ないようにしている。また、職員がゲームや話で場面を変え、気分転換を図っている。	/	/	/	
12	馴染みの人や場との関係継続の支援	a	これまで支えてくれたり、支えてきた人など、本人を取り巻く人間関係や馴染みの場所などについて把握している。	△	主にキーパーソンになる家族から、人間関係や馴染みの場所などは伺っている。	/	/	/	
		b	知人や友人等が気軽に訪れたり、本人が知人や友人等に会いに行ったり、馴染みの場所に出かけていたりなど、これまで大切にしてきた人や場所との関係が途切れないよう支援している。	△	コロナ禍により面会や外出ができない為、できていない。電話ができる利用者は、電話で友人や知人と話すことで関係は続いている。	/	/	/	
13	日常的な外出支援	a	利用者(および意思表示が困難な場合はご家族)の希望に沿って、戸外に出かけられるよう取り組んでいる。(職員側の都合を優先したり、外出する利用者、時間帯、行き先などが固定化していない) (※重度の場合は、戸外に出て過ごすことも含む)	△	天候の良い日は、敷地内を散歩し、日光浴を行っている。以前は本人の希望に沿って、墓参りや散髪など行っていたが今はコロナ禍のため、戸外に出かけることはない。	○	x	○	コロナ禍において、事業所には外出制限が設けられているものの、日頃から敷地内の広い庭を散歩したり、天気の良い日は庭でお弁当やおやつを食べたりするなど、戸外に出て、利用者が気分転換を図れるよう支援している。また、重度の利用者も、車いすを使用して、散歩や外気に触れられるような支援に努めている。さらに、利用者から要望が出され、感染状況を見計らいながら、お墓参りに出かけられるよう支援したこともある。
		b	家族、地域の人やボランティア、認知症サポーター等の協力も得ながら、外出支援をすすめている。	x	コロナ禍のためできていない。	/	/	/	
14	心身機能の維持、向上を図る取り組み	a	職員は認知症や行動・心理症状について正しく理解しており、一人ひとりの利用者の状態の変化や症状を引き起こす要因をひもとき、取り除くケアを行っている。	○	研修で学んだり、利用者一人一人の思いに耳を傾け、要員や背景を探り、ケアに繋げている。	/	/	/	時間的な余裕があれば、職員は利用者自身に着替えや靴を履くなどのことができることを自分でしてもらい、見守りや待つ介護に努めている。時には、時間の余裕がなく、職員がつい手を出し、手伝ってしまうことも見られる。訪問調査日には、歩行器を使用して歩行訓練をしている利用者を、職員が後方から見守りしている様子を見ることができた。空ユニットでは、利用者の高齢化や認知症の進行に伴い、身体が動かさずらく、できることが少なくなってきた。また、日頃から散歩や体操のほか、調理、洗濯物たたみ、トイレへ自分で行くなどの生活リハビリを取り入れて、職員は利用者の心身機能の維持に努めている。中には、職員としりとりをしながら、笑顔で歩行練習を楽しみながら行う利用者もいる。
		b	認知症の人の身体面の機能低下の特徴(筋力低下・平衡感覚の悪化・排泄機能の低下・体温調整機能の低下・嚥下機能の低下等)を理解し、日常生活を営む中で自然に維持・向上が図れるよう取り組んでいる。	○	毎日の体操や散歩を取り入れ機能低下の予防や、口腔体操を続け、嚥下機能の低下を予防している。また排泄も、できる限りトイレで行えるよう取り組んでいる。	/	/	/	
		c	利用者の「できること、できそうなこと」については、手や口を極力出さずに見守ったり一緒に行うようにしている。(場面づくり、環境づくり等)	○	できるだけ見守りながら本人に行っていたくようにしているが、手伝う場面も多々ある。	○	/	○	
15	役割、楽しみごと、気晴らしの支援	a	利用者一人ひとりの生活歴、習慣、希望、有する力等を踏まえて、何が本人の楽しみごとや役割、出番になるのかを把握している。	○	家族から習慣や有する力を聞き取りし、日常生活で役割を担っていただいている。職員も把握しており、出番になる場面を作っている。	/	/	/	洗濯物たたみや掃除、調理の手伝い、花の水やり、野菜づくりなど、職員は利用者にも役割を担ってもらえるよう支援するとともに、手伝ってもらった後には、感謝の言葉を伝えている。裁縫の得意な利用者には、ボタン付けや雑巾を縫ってもらうこともある。また、食材を玄関から台所まで運んだり、新聞を取りに行ったりすることを日課の役割としている利用者もあり、職員は少しでもできる役割を担ってもらえるよう取り組んでいる。
		b	認知症や障害のレベルが進んでも、張り合いや喜びのある日々を過ごすように、日常的に、ホームの内外で一人ひとりの楽しみごとや役割、出番をつくる取り組みを行っている。	○	認知症や障害のレベルが進んで、できる事が減っていても、それぞれの力が発揮できるような役割を見つけ、自信を持っていただけるよう取り組んでいる。	◎	○	◎	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
16	身だしなみやおしゃれの支援	a	身だしなみを本人の個性、自己表現の一つと捉え、その人らしい身だしなみやおしゃれについて把握している。	○	季節に合った洋服や、ヘアピンを自分で選び、お洒落を楽しんでいる。自分で選べない方は職員が選んでいる。				各ユニットに、2名ずつの食事介助が必要な利用者があり、職員は見守りやサポートを行うほか、食べこぼしなどをさりげなくフォローをしている。また、入浴時などの着替えも、利用者の意向に沿って行うとともに、重度な利用者にも、夜はパジャマに着替えて、日中には普段着に着替えてもらうなど、メリハリのある生活が送れるよう支援している。さらに、男性利用者に声をかけ、電気シェイバーを使用して髭剃りを自身で行ってもらい、職員は剃り残しの確認やサポートをしている。
		b	利用者一人ひとりの個性、希望、生活歴等に応じて、髪形や服装、持ち物など本人の好みで整えられるよう支援している。	○	自分で服を選んだり、整容をする方もいる。月に1度のボランティア散髪では、好みの髪形や、長さにしてもらっている。				
		c	自己決定がしにくい利用者には、職員が一緒に考えたりアドバイスする等本人の気持ちにそって支援している。	○	声掛けの工夫や、自己決定しやすいように、選択肢を減らしたり、表情を見て、決めている。				
		d	外出や年中行事等、生活の彩りにあわせてその人らしい服装を楽しめるよう支援している。	○	好みやこだわりを尊重して、本人に任せている。行事ではその場面にに応じて決めている。				
		e	整容の乱れ、汚れ等に対し、プライドを大切にできなくなり、口周りをケアしている。(髭、着衣、履き物、食べこぼし、口の周囲等)	○	自尊心を傷つける事が無いよう、小声で誘導するよう気を付けている。	◎	○	○	
		f	理容・美容は本人の望む店に行けるように努めている。	×	以前は家族の協力を得たり、職員が行っていたが、現在はコロナのためできていない。				
		g	重度な状態であっても、髪形や服装等本人らしさが保てる工夫や支援を行っている。	○	重度になっても、場面や状況に合わせて、髪型や服装には気を配っている。			○	
17	食事を楽しむことのできる支援	a	職員は、食事の一連のプロセスの意味や大切さを理解している。	◎	食事をする環境や、食事形態、食事の摂り方などが心身に及ぼす影響を理解できている。				管理栄養士の資格を持つ施設長が、栄養バランスや利用者の嗜好を取り入れて献立を作成するとともに、食材は地元の商店に注文して配達してもらい、利用者に食材を切るなどの調理の下ごしらえや後片づけ、食材運び、納品チェックなどを手伝ってもらいながら、職員が調理をしている。地域の行事食を取り入れたり、誕生日には特別メニューを提供したりするなど、手作りの食事は、利用者に変えられている。天気の良い日には、お弁当を作って庭で食べたり、畑で取れた旬の野菜を使用したメニューが食卓に上ったりするなど、食事が楽しめるよう工夫をしている。箸は使い慣れた物を家から持参して使用してもらうほか、食器類は事業所で用意した使いやすい物を使用している。利用者の状態に合わせて、一口サイズや刻み食、ミキサー食などの対応をしている。また、食事の際に、職員は利用者と同じテーブルに座り、見守りやさりげないサポートをしながら、一緒に食事を摂ることができている。さらに、食事前には口腔ケア体操を行うとともに、キッチンから食事の音や匂いが感じられ、重度の利用者にも献立の説明を行うなど、職員は食事が待ちどおしくなるような雰囲気づくりをしている。加えて、職員間で調理方法や食事の摂取量などを話し合うこともできている。
		b	買い物や献立づくり、食材選び、調理、後片付け等、利用者とともにやっている。	△	ねぎを切ったり、ゴボウのさがきをするなど、簡単な作業は共に行ったりしている。			○	
		c	利用者とともに買い物、調理、盛り付け、後片付けをする等を行うことで、利用者の力の発揮、自信、達成感につなげている。	△	調理を手伝ってもらったら、必ず御礼を伝え、仕上がりをはめている。				
		d	利用者一人ひとりの好きなものや苦手なもの、アレルギーの有無などについて把握している。	◎	利用者一人ひとりの食べれない物や、アレルギーが出るものを、キッチンに目立つように貼っており、職員全員が把握している。				
		e	献立づくりの際には、利用者の好みや苦手なもの、アレルギー等を踏まえつつ、季節感を感じさせる旬の食材や、利用者にとって音なつかしいもの等を取り入れている。	◎	季節に応じて、旬の食材をメニューに取り入れ、イベントや祭りなど、行事に合わせて献立に趣向を凝らしている。			○	
		f	利用者一人ひとりの咀嚼・嚥下等の身体機能や便秘・下痢等の健康状態にあわせて調理方法としつつ、おいしそうな盛り付けの工夫をしている。(安易にミキサー食や刻み食で対応しない、いろどりや器の工夫等)	○	刻み食であっても、他と同じような彩りになるよう盛り付けし、「これは〇ですよ」等、何かわかるように声掛けしている。				
		g	茶碗や湯飲み、箸等は使い慣れたもの、使いやすいものを使用している。	○	箸は一人ひとり決めている。また、湯飲みも一部の方が決まったものを使っている。			○	
		h	職員も利用者と同じ食卓を囲んで食事を一緒に食べながら一人ひとりの様子を見守り、食事のペースや食べ方の混乱、食べこぼしなどに対するサポートをさりげなく行っている。	◎	同席して、同時に食べるようにし、嘔吐めやむせがないよう気を付けている。また、食べこぼしなどに気をつけることのないよう、声掛けしている。			◎	
		i	重度な状態であっても、調理の音やにおい、会話などを通して利用者が食事が待ちどおしくおいしく味わえるよう、雰囲気づくりや調理に配慮している。	◎	調理中に匂いがしてきたら、「いい匂い、今日のメニューは〇ですよ」と声掛けし、食べる意欲を持っていただくよう配慮している。	◎		◎	
		j	利用者一人ひとりの状態や習慣に応じて食べられる量や栄養バランス、カロリー、水分摂取量が1日を通じて確保できるようにしている。	◎	毎日、水分補給の時間を決め水分摂取している。また、毎回の食事量を記録し、職員全員で把握し、不足していれば栄養補助食品等で、補給している。				
		k	食事量が少なかったり、水分摂取量の少ない利用者には、食事の形態や飲み物の工夫、回数やタイミング等工夫し、低栄養や脱水にならないよう取り組んでいる。	◎	こまめに水分補給を行ったり、飲みみにくい方には、アイスクリームや氷を提供している。また、高カロリーの栄養補助食品も提供する場面もある。				
		l	職員で献立のバランス、調理方法などについて定期的に話し合い、偏りがないように配慮している。場合によっては、栄養士のアドバイスを受けている。	○	栄養士の資格を持つ施設長が、献立を立てており、バランスにきにも良い。			○	
		m	食中毒などの予防のために調理用具や食材等の衛生管理を日常的に行い、安全で新鮮な食材の使用と管理に努めている。	◎	清潔な調理器具を使い、まな板は定期的に次亜塩素酸で消毒している。また、調理するものはたくさん作らず、一度に食べる量を作っている。				

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
18	口腔内の清潔保持	a	職員は、口腔ケアが誤嚥性肺炎の防止につながることを知っており、口腔ケアの必要性、重要性を理解している。	◎	訪問診療をしていただいている歯科医より毎月助言を頂き、職員全員が確認し、口腔ケアに取り入れている。	/	/	/	歯科医などに指示やアドバイスをもらい、職員は口腔ケアの重要性を理解している。毎食後に、職員は声をかけて、居室にある洗面台で、利用者は口腔ケアを実施している。必要に応じて、職員は見守りやサポートをしている。定期的に、職員は全ての利用者の口腔内の健康状態を確認して把握することができているが、アセスメントシートなどへ記録するまでには至っていないため、記録が残せることを期待したい。また、年1回歯科医による定期検診が行われているほか、定期的に訪問歯科診療を受診している利用者もいる。
		b	利用者一人ひとりの口の中の健康状況(虫歯の有無、義歯の状態、舌の状態等)について把握している。	○	食後の口腔ケアの際、異常に気付いたら、看護師に伝え、助言をいただいている。また、職員にも申し送りで伝達し、共有している。	/	/	○	
		c	歯科医や歯科衛生士等から、口腔ケアの正しい方法について学び、日常の支援に活かしている。	◎	訪問診療をしていただいている歯科医より毎月助言を頂き、職員全員が確認し、口腔ケアに取り入れている。	/	/	/	
		d	義歯の手入れを適切に行えるよう支援している。	○	手順のわからない利用者には、付き添い説明したり、手伝ったりしている。できない場合は職員が行っている。	/	/	/	
		e	利用者の力を引き出しながら、口の中の汚れや臭いが生じないように、口腔の清潔を日常的に支援している。(歯磨き・入れ歯の手入れ・うがい等の支援、出血や炎症のチェック、歯科医の受診等)	◎	毎食後声掛けし、可能な範囲ご本人に任せているが、足りない所は介助している。定期的な受診に加え、不具合を確認したら、その都度報告し、対応している。	/	/	○	
19	排泄の自立支援	a	職員は、排泄の自立が生きる意欲や自信の回復、身体機能を高めることにつながることや、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)の使用が利用者の心身に与えるダメージについて理解している。	◎	失敗しても、自尊心に配慮した声掛けを行っている。また、安易にオムツを勧めたり、無理強いしないようにしている。	/	/	/	事業所では、基本的に利用者がトイレで排泄できるよう支援している。毎月実施するユニット会の中で、利用者の排泄支援の状況を話し合うとともに、状態に合わせて、適切な紙パンツやパッドなどの排泄用品の使用の検討を行い、家族に相談の上で使用している。中には、浴室と繋がっているトイレもあり、汚れや洗浄が必要な場合には、支援を行いやすい建物の構造となっている。また、散歩や運動のほか、水分補給、軟便剤などを取り入れ、利用者が自然排便が行えるよう支援している。
		b	職員は、便秘の原因や及ぼす影響について理解している。	○	研修で知識を得たり、Drや看護師から助言を頂いている。	/	/	/	
		c	本人の排泄の習慣やパターンを把握している。(間隔、量、排尿・排便の兆候等)	○	排便は量、形状を記録し、いつでも確認できるようにしている。	/	/	/	
		d	本人がトイレで用を足すことを基本として、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)使用の必要性や適切性について常に見直し、一人ひとりのその時々状態にあった支援を行っている。	◎	安易のオムツに変えるのではなく、申し送りやミーティングでを活用し、オムツが本当に本人にとって必要か、適切かを話し合い、検討して支援に繋いでいる。	◎	/	◎	
		e	排泄を困難にしている要因や誘因を探り、少しでも改善できる点はないか検討しながら改善に向けた取り組みを行っている。	◎	看護師に相談しながら、水分飛球や服薬、運動など取り入れている。	/	/	/	
		f	排泄の失敗を防ぐため、個々のパターンや兆候に合わせて早めの声かけや誘導を行っている。	○	決まった時間にトイレに誘導し、それ以外でも臨機応変に対応している。	/	/	/	
		g	おむつ(紙パンツ・パッドを含む)を使用する場合は、職員が一方的に選択するのではなく、どういう時間帯にどのようなものを使用するか等について本人や家族と話し合い、本人の好みや自分で使えるものを選択できるよう支援している。	○	ミーティングで話し合い、家族の了承を得て、本人に提案している。無理強いはいしないよう気を付けている。	/	/	/	
		h	利用者一人ひとりの状態に合わせて下着やおむつ(紙パンツ・パッドを含む)を適時使い分けしている。	◎	尿量等把握して、昼間、夜間と使い分けしている。	/	/	/	
		i	飲食物の工夫や運動への働きかけなど、個々の状態に応じて便秘予防や自然排便を促す取り組みを行っている。(薬に頼らない取り組み)	○	便秘の訴えがあれば水分補給や散歩などの運動を促している。	/	/	/	
20	入浴を楽しむことができる支援	a	曜日や時間帯を職員が都合で決めてしまわずに、利用者一人ひとりの希望や習慣にそって入浴できるよう支援している。(時間帯、長さ、回数、温度等)	○	できるだけ本人の希望に沿った時間にしよう心掛けている。夏は入浴剤を入れて、気分転換を図っている。	◎	/	○	事業所の1階には個別浴槽が設置されているほか、2階には機械浴槽が設置され、利用者の状態に応じて使い分け、安心安全な入浴を支援している。毎日10時から15時までの時間帯には、利用者は自由に入浴することができ、最低でも週2回以上入浴できる機会を確保している。中には、毎日入浴を希望する利用者もあり、希望通りに対応することもできている。また、入浴を拒む利用者もあり、時間変更や声かけの工夫を行い、職員は入浴してもらえるよう支援している。
		b	一人ひとりが、くつろいだ気分が入浴できるよう支援している。	◎	介助が必要でない利用者は、あまり介入せず、時々声掛けし、安否を確認しながらくつろいで入浴できるよう心掛けている。	/	/	/	
		c	本人の力を活かしながら、安心して入浴できるよう支援している。	◎	できる所は本人にしてもらっている。背中、頭など、介助が必要なところは、雑談をしながら手伝っている。	/	/	/	
		d	入浴を拒む人に対しては、その原因や理由を理解しており、無理強いせず気持ちよく入浴できるよう工夫している。	○	本人の気持ちを尊重するように心がけ、声かけに拒否があったら時間を変え声掛けしたり、気分転換をはかったりしている。排泄の失敗や、拒否が続く場合無理強いする場合がある	/	/	/	
		e	入浴前には、その日の健康状態を確認し、入浴の可否を見極めるとともに、入浴後の状態も確認している。	◎	入浴前にバイタルチェックし、表情等も観察している。また、入浴後は必ず水分補給をし、わずかな変化にも気を配っている。	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
21	安眠や休息の支援	a	利用者一人ひとりの睡眠パターンを把握している。	○	夜勤をしていないパート職員も、夜勤者の記録を見たり、申し送りを聴いて、把握に努めている。	/	/	/	事業所では、入居前からの継続も含めて、半数以上の利用者が眠剤を服用している。中には、運動や散歩などの日中の活動量を増やしたり、日光浴を取り入れたりすることで、服薬の量を減らすことのできた利用者もいる。また、夜間の転倒などの危険を回避するために、医師と相談して、服薬の量が追加された利用者もいる。現在は、ほとんどの利用者が、夜間に良眠することができている。
		b	夜眠れない利用者についてはその原因を探り、その人本来のリズムを取り戻せるよう1日の生活リズムを整える工夫や取り組みを行っている。	◎	日中廊下やデッキを歩いたり、明るい陽射しにあたるよう、メリハリのある生活を心がけている。夜間眠れない場合は、話を傾聴したり、温かいお茶を提供している。	/	/	/	
		c	利用者の数日間の活動や日中の過ごし方、出来事、支援内容などを十分に検討し、医師とも相談しながら総合的な支援を行っている。	○	日中の活動状況や、出来事を職員と看護師が相談し医師に相談しながら薬の処方を行っている。	/	/	○	
		d	休息や昼寝等、心身を休める場面が個別に取れるよう取り組んでいる。	◎	本人の体調や、その日の過ごし方で、個別に休んで頂いている。	/	/	/	
22	電話や手紙の支援	a	家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている。	◎	本人の要望に応じ、家族に電話をかけている。また、年賀状や、暑中見舞いなど手紙を書く機会を作り、家族にも事前に返事を頂くよう頼んでいる。	/	/	/	/
		b	本人が手紙が書けない、電話はかけられないと決めつけず、促したり、必要な手助けをする等の支援を行っている。	◎	本人が書けない場合は、会話の中で言葉を拾って、代理で各など、必要に応じ手助けしている。	/	/	/	
		c	気兼ねなく電話できるよう配慮している。	◎	要望には応じている。	/	/	/	
		d	届いた手紙や葉書をそのまませず音信がとれるように工夫している。	△	見えにくい利用者には読み聞かせている。返事を出せる利用者が少なく、そのままになっていることが多い。	/	/	/	
		e	本人が電話をかけることについて家族等に理解、協力してもらおうとともに、家族等からも電話や手紙をくれるようお願いしている。	◎	携帯を持っている利用者もあり、自由にやり取りしている。毎日ペットの様子を絵手紙にし、送ってくれる家族もあり、協力的である。	/	/	/	
23	お金の所持や使うことの支援	a	職員は本人がお金を所持すること、使うことの意味や大切さを理解している。	○	使う機会はありませんが、訪問販売のパンなどを購入することもある。意味や理解をされている利用者もいる。	/	/	/	/
		b	利用者が気兼ねなく安心して買い物ができるよう、日頃から買い物先の理解や協力を得る働きかけを行っている。	×	以前は一緒に出掛け、買い物をしていたが、最近はコロナ禍でできていない。	/	/	/	
		c	「希望がないから」「混乱するから」「失くすから」などと一方的に決めてしまうのではなく、家族と相談しながら一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している。	×	職員の人数が減っているため、一人一人の希望に応じられない。また、コロナの為外出が困難で、お金を使う支援ができない。	/	/	/	
		d	お金の所持方法や使い方について、本人や家族と話し合っている。	◎	入所時に説明している。金額にもよるが、お金を使う場合、その都度家族に連絡している。	/	/	/	
		e	利用者が金銭の管理ができない場合には、その管理方法や家族への報告の方法などルールを明確にしており、本人・家族等の同意を得ている。(預り金規程、出納帳の確認等)。	◎	入所時に話し合っている。預かる際は、預り証を私、来訪時、出納帳にサインをもらっている。また、出納帳は毎月家族に郵送し、確認してもらっている。	/	/	/	
24	多様なニーズに応える取り組み		本人や家族の状況、その時々ニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる。	◎	本人のニーズに応えられるよう、家族とも相談し、協力を仰ぎ柔軟な支援を心がけている。(自宅に郵便物を取りに行くなど)	◎	/	◎	コロナ禍において、事業所には外出や面会などの制限が設けられ、可能な範囲で柔軟に対応をしている。利用者から「お墓参りに行きたい」という要望を叶えるため、事業所では感染状況を見計らいながら、家族に協力してもらい、お墓参りに出かけるなどの対応を行い、利用者や家族から大変喜ばれている。
(3) 生活環境づくり									
25	気軽に入れる玄関まわり等の配慮		利用者や家族、近隣の人等にとって親しみやすく、気軽に入りができるように、玄関や建物周囲の工夫をしている。	◎	季節にあった花を植え、利用者と一緒に水やりをしている。スロープを設置しており、車いすや、歩行器でも出入りし易い。	◎	◎	◎	事業所の敷地内は広く、駐車場から玄関まで、芝生の庭を歩きながら、利用者や来訪者は季節の木々の緑や咲いた花を感じることができるようになっている。また、来訪者をセンサーチャイムで知らせてくれ、職員が出迎えなどの対応もしている。

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
26	居心地の良い共用空間づくり	a	共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)は、家庭的な雰囲気有しており、調度や設備、物品や装飾も家庭的で、住まいとしての心地良さがある。(天井や壁に子供向けの飾りつけをしていたり、必要なものが置いていない寂風景な共用空間等、家庭的な雰囲気をそぐような設えになっていない等。)	◎	季節に応じた飾りをして、ゆったりとくつろげるソファを置き、誰でも座れるようになっている。掃き出し窓からは畑も見え、家庭的な雰囲気になっている。	◎	◎	◎	玄関は広く、目につく場所に、職員の顔写真が貼られたウエルカムボードが設置され、来訪者を出迎えてくれる。玄関ホールには、ソファやテーブルセットが置かれ、利用者や来訪者はくつろげるようになっている。また、正面の壁には各ユニットの利用者の長寿番付と、利用者一人ひとりのしてみたいことが大きく書かれた紙が貼り出されていた。壁には、ハロウィンなどの季節の飾り付けが行われているほか、習字や俳句などの利用者の作品も飾られている。さらに、共有部分は整理整頓され、清掃や消毒、換気も行き届き、居心地の良い空間となっている。加えて、事業所内には家族が宿泊できる部屋も用意されている。敷地内には畑もあり、野菜づくりをしている利用者もいる。
		b	利用者にとって不快な音や光、臭いがないように配慮し、掃除も行き届いている。	◎	掃除、消毒、環境整備は常に心掛けている。不快な音や、嫌な臭いも感じられないように気をつけている。			◎	
		c	心地よさや能動的な言動を引き出すために、五感に働きかける様々な刺激(生活感や季節感を感じるもの)を生活空間の中に採り入れ、居心地よく過ごせるよう工夫している。	◎	デッキに出ると、季節に応じた花が咲き、季節感を感じられる。リビングには飾り物で四季を感じ、調理では季節の旬にものを提供している。			◎	
		d	気の合う利用者同士で思い思いに過ごせたり、人の気配を感じながらも独りになれる居場所の工夫をしている。	○	ホールにソファを置き、気の合う利用者同士で談笑されている。独りになりたい時は居室で自由に過ごしている。				
27	居心地良く過ごせる居室の配慮		本人や家族等と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている。	○	使い慣れた物、馴染みのある家具、家族の写真などを置き、ご自分の家にいるような、居心地よい環境にしている。	◎		◎	居室には、ベッドや布団、エアコン、押し入れ、洗面台が備え付けられている。中には、エアロバイクや加湿器、テレビ、扇風機、家族の写真を持ち込み、居心地の良い空間づくりをしている利用者もいる。また、持ち込んだ物を含めて、すっきりと整理整頓されている居室も多い。
28	一人ひとりの力が活かせる環境づくり	a	建物内部は利用者一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、混乱や失敗を防ぎ、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように配慮や工夫をしている。	○	各居室にネームプレートを設置し、自分の部屋とわかるようにしている。トイレ、浴室にはマークをつけて分かり易くしている。			○	各居室の入り口には、利用者の写真と年齢が記載された職員手作りのネームプレートが設置され、利用者が居室を認識しやすいよう工夫されている。また、トイレには、大きくて、分かりやすいように「便所」と記載している。中には、敷地内にある畑に出て、野菜づくりをしている利用者もいる。
		b	利用者の活動意欲を触発する馴染みの物品が、いつでも手に取れるように生活空間の中にさりげなく置かれている。(ほうき、裁縫道具、大工道具、園芸用品、趣味の品、新聞・雑誌、ポット、急須・湯飲み・お茶の道具等)	◎	新聞や、馴染みの土地(宇和島)に関する写真集や本を手が届く場所に置いている。園芸用品や裁縫道具などは保管しており、職員と一緒に行う時出している。				
29	鍵をかけないケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が、居室や日中にユニット(棟)の出入り口、玄関に鍵をかけることの弊害(鍵をかけられ出られない状態で暮らしていることの異常性、利用者にもたらす心理的不安や閉塞感・あきらめ・気力の喪失、家族や地域の人にもたらす印象のデメリット等)を理解し、日中は玄関に鍵をかけることなく済むように工夫している。(外出の察知、外出傾向の把握、近所の理解・協力の促進等)	○	鍵を掛けることの弊害は理解している。日中はどこも鍵はかけておらず、自由に入出入りできるようにしている。玄関には出入りの際のチャイムが鳴るようにしてあり、鳴れば職員が対応している。外出傾向の利用者の居室にはセンサーを設置し、利用者の動きがわかるように対応、即時駆け付けられるようにしている。	◎	◎	○	代表者と施設長、管理者、職員は、日中に居室やユニットの出入り口、玄関に鍵をかけることの弊害を理解している。玄関は、来訪者が来ると分かりやすいように、センサーチャイムが鳴るようになっており、コロナ禍においても、対応しやすくなっている。また、ユニットのキッチンから、職員は廊下まで見渡せないために、ミラーを設置するなどの工夫が行われている。また、夜間は防犯のため、19時から6時まで玄関の施錠をしている。
		b	鍵をかけない自由な暮らしについて家族の理解を図っている。安全を優先するために施錠を望む家族に対しては、自由の大切さと安全確保について話し合っている。	○	家族には契約時に説明し、理解を得ている。				
(4) 健康を維持するための支援									
30	日々の健康状態や病状の把握	a	職員は、利用者一人ひとりの病歴や現病、留意事項等について把握している。	○	24hシートや健康チェック表、日誌等で情報収集し、把握している。				
		b	職員は、利用者一人ひとりの身体状態の変化や異常のサインを早期に発見できるように注意しており、その変化やサインを記録に残している。	○	24hシートや健康チェック表、日誌、ケース記録に残している。				
		c	気になることがあれば看護職やかかりつけ医等にいつでも気軽に相談できる関係を築き、重度化の防止や適切な入院につなげる等の努力をしている。	○	主治医や事業所の看護師に相談しながら利用者個々に応じている。				
31	かかりつけ医等の受診支援	a	利用者一人ひとりのこれまでの受診状況を把握し、本人・家族が希望する医療機関や医師に受診できるよう支援している。	◎	本人や家族に相談しながら医療機関や医師に受診できるよう支援している。	◎			
		b	本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している。	○	本人や家族に相談し、意向を伺いながら納得できる医療機関で、診療を受けられるよう支援している。				
		c	通院の仕方や受診結果の報告、結果に関する情報の伝達や共有のあり方等について、必要に応じて本人や家族等の合意を得られる話し合いを行っている。	○	必要時、家族にも通院に同席して頂いている。同席がない場合は結果を報告している。				

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
32	入退院時の医療機関との連携、協働	a	入院の際、特にストレスや負担を軽減できる内容を含む本人に関する情報提供を行っている。	○	入院の際は情報提供を行い、本人の状態を伝えている。				
		b	安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、日頃から病院関係者との情報交換や相談に努めている。	○	管理者、看護職員が主に病院関係者と連絡を取り合いながら、随時家族とも連携し、行っている。				
33	看護職との連携、協働	a	介護職は、日常の関わりの中で得た情報や気づきを職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談している。看護職の配置や訪問看護ステーション等との契約がない場合は、かかりつけ医や協力医療機関等に相談している。	◎	介護職員は、日々の気づきや情報を、看護職員に伝え、看護職員より主治医に報告、相談を行っている。				
		b	看護職もしくは訪問看護師、協力医療機関等に、24時間いつでも気軽に相談できる体制がある。	◎	24時間いつでも連絡できる体制になっている。				
		c	利用者の日頃の健康管理や状態変化に応じた支援が適切にできるよう体制を整えている。また、それにより早期発見・治療につなげている。	◎	毎日健康チェック表にバイタルを測定と、排便の状態を記録し、確認することで、体調の変化や、早期発見ができ、治療に繋げることができる。				
34	服薬支援	a	職員は、利用者が使用する薬の目的や副作用、用法や用量について理解し、本人の状態の経過や変化などを記録し、家族や医師、看護職等に情報提供している。	○	受診記録や薬の説明書により、確認している。本人の状態の経過や変化などは24hシートや健康チェック表に記録、看護職員はそれを家族や、主治医に情報提供している。				
		b	利用者一人ひとりが医師の指示どおりに服薬できるよう支援し、飲み忘れや誤薬を防ぐ取り組みを行っている。	○	個別に薬袋を準備している。また介助した職員が健康チェック表にサインし、責任を負っている。				
		c	服薬は本人の心身の安定につながっているのか、また、副作用(周辺症状の誘発、表情や活動の抑制、食欲の低下、便秘や下痢等)がないかの確認を日常的に行っている。	○	日々様子観察し、変化や異常があれば看護職員を通して主治医に相談している。				
35	重度化や終末期への支援	a	重度化した場合や終末期のあり方について、入居時、または状態変化の段階ごとに本人・家族等と話し合いを行い、その意向を確認しながら方針を共有している。	◎	段階ごとに本人、家族と相談し、意思の確認をしながら方針を共有している。				事業所には、「重度化した場合における対応に係る指針」「重度化及び看取りに関する指針」があり、家族等に対応できることの説明を行い、医療連携体制の同意を得ている。重度化や終末期の過ごし方について、医師から直接家族に状態を説明してもらうとともに、利用者や家族、医師、関係者で情報共有を行い、方針を共有している。また、24時間体制で医師との連携が取れているほか、代表者や施設長、管理者、看護師等との連絡体制も整備され、希望に応じて、積極的な看取り支援にも取り組んでおり、訪問調査月の前月にも、看取り支援を経験している。さらに、夜間急変時の対応は、法人の代表者や施設長等に連絡するほか、状況に応じて、家族や医師と連携を図れるようになっている。職員の聞き取りからは、「利用者や家族、職員が安心して、最期を過ごすことができた」などの話を聞くことができた。
		b	重度化、終末期のあり方について、本人・家族だけではなく、職員、かかりつけ医・協力医療機関等関係者で話し合い、方針を共有している。	◎	カンファレンスやかかりつけ医の往診等、家族や本人と共に今後について話し合い、方針を共有している。	◎		◎	
		c	管理者は、終末期の対応について、その時々職員の思いや力量を把握し、現状ではどこまでの支援ができるかの見極めを行っている。	○	カンファレンスを行い、介護職のできる事など具体的に話し合い、対応している。				
		d	本人や家族等に事業所の「できること・できないこと」や対応方針について十分な説明を行い、理解を得ている。	○	その都度話し合い、理解して頂いている。				
		e	重度や終末期の利用者が日々をより良く暮らせるために、家族やかかりつけ医など医療関係者と連携を図りながらチームで支援していく体制を整えている。あるいは、今後の変化に備えて検討や準備を行っている。	○	重度や終末期において変化があった場合、家族やかかりつけ医とこまめに連絡を取り合い、今後の方針を決め、それに沿ってチームケアで支援している。				
		f	家族等への心理的支援を行っている。(心情の理解、家族間の事情の考慮、精神面での支え等)	△	最近はコロナ禍のため面会ができにくくなっており、できる限り状態の変化など、電話で報告し、いよいよという時は人数生解し、会って頂いている。				
36	感染症予防と対応	a	職員は、感染症(ノロウイルス、インフルエンザ、白癬、疥癬、肝炎、MRSA等)や具体的な予防策、早期発見、早期対応策等について定期的に学んでいる。	△	定期的には学んでいないが、感染症が流行するころに、ミーティングなどで対応策は話し合っている。				
		b	感染症に対する予防や対応の取り決めがあり、万が一、感染症が発生した場合に速やかに手順にそった対応ができるよう日頃から訓練を行うなどして体制を整えている。	△	感染症対策のマニュアルは作成しているが、日頃からの訓練はできていない。				
		c	保健所や行政、医療機関、関連雑誌、インターネット等を通じて感染症に対する予防や対策、地域の感染症発生状況等の最新情報を入手し、取り入れ、随時対応している。	○	行政や医療機関、テレビや新聞などから情報を入手し、共有している。				
		d	職員は手洗いやうがいなど徹底して行っており、利用者や来訪者等についても清潔が保持できるよう支援している。	◎	玄関にははくとすぐ、洗面所があり出勤した職員は手洗い、消毒を行いユニットに入っている。来訪者にも玄関で消毒をして頂き、清潔保持をおこなっている。				

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと	
II. 家族との支え合い										
37	本人をともに支え合う家族との関係づくりと支援	a	職員は、家族を支援される一方の立場におかず、喜怒哀楽をともにし、一緒に本人を支えていく関係を築いている。	○	毎月の手紙のやりとり、ラインなどでも、本人の近況を報告し、情報交換している。	/	/	/	コロナ禍以前は、花見や敬老会などに合わせて、年2回家族会を実施し、家族同士の交流を図ることができていたが、現在は開催を自粛している。コロナ禍において、家族が来訪する機会が減少しているものの、ガラス越しやリモートの面会にも対応をしている。利用者の誕生日会などの際には、事業所の通信機器を活用して、家族に動画を送るなどの対応を行い、家族に喜ばれている。また、毎月のしおり便りの発行に合わせて、担当職員が利用者の近況報告を兼ねた手紙を添えて送付している。手紙に関しては、家族から、代表者や施設長、管理者に電話で、「ありがとうございます」などの連絡をもらうこともある。毎年4月のしおり便りには、職員の異動を含めた新たな職員体制の顔写真を掲載している。さらに、設備改修などの報告について、管理者は、「今後の検討課題である」と考えている。加えて、来訪時や電話連絡時を活用して、職員は利用者の様子を伝えて、家族から意見や要望を聞くよう努めている。	
		b	家族がホームでの活動に参加できるように、場面や機会を作っている。(食事づくり、散歩、外出、行事等、家族同士の交流)	△	コロナ前は夏祭りや、認知症カフェ等、イベントの度招待していた。	◎	/	○		
		c	家族が知りたいことや不安に感じていること等の具体的内容を把握して、家族の来訪時や定期的な報告などにより、利用者の暮らしぶりや日常の様子を具体的に伝えている。(「たより」の発行・送付、メール、行事等の録画、写真の送付等)	○	毎月、担当者が利用者の近況を書いて、手紙を送っている。また、広報でも直近の利用者様の様子を写真や文字にして掲載している。連絡をとる際には、利用者様の近況を伝え、家族の意見や要望も伺っている。	◎	/	○		
		d	これまでの本人と家族との関係の理解に努め、より良い関係を築いていけるように支援している。(認知症への理解、本人への理解、適切な接し方・対応等についての説明や働きかけ、関係の再構築への支援等)	○	最初はフェースシートにより、本人と家族の関係性を確認し、必要事項等共有している。	/	/	/		/
		e	事業所の運営上の事柄や出来事について都度報告し、理解や協力を得るようにしている。(行事、設備改修、機器の導入、職員の異動・退職等)	△	職員の異動や退職等はお手紙に記載しているが、施設改修や、危機の導入等は報告していない。	◎	/	/		○
		f	利用者一人ひとりに起こり得るリスクについて家族等に説明し、抑圧感のない暮らしを大切にしたい対応策を話し合っている。	○	入所時からリスクについては説明し、本人の意思を尊重したうえで対応策を提案している。	/	/	/		/
		g	家族が、気がかりなことや、意見、希望を職員に気軽に伝えたり相談したりできるように、来訪時の声かけや定期的な連絡等を積極的に行うことで、居心地よく安心して過ごせるような雰囲気づくりや対応を行っている。(来やすい雰囲気、関係再構築の支援、湯茶の自由利用、居室への宿泊のしやすさ等)	○	来訪時は、明るくあいさつし、気軽に声をかけていただけるように心がけている。コロナ禍での面会制限中の為、窓越しの面会時には、利用者のユニット専属の職員から、普段の様子をお伝えし、明るい雰囲気でお会いできるようにしている。	/	/	/		○
38	契約に関する説明と納得	a	契約の締結、解約、内容の変更等の際は、具体的な説明を行い、理解、納得を得ている。(食費、光熱水費、その他の自己負担額、敷金設定の場合の償却、返済方法等)	◎	入所時に説明している。途中で変更があった場合には、書面にして説明し、理解、納得を得て、同意書にサインもいただいている	/	/	/		
		b	退居については、契約に基づくとともにその決定過程を明確にし、利用者や家族等に具体的な説明を行った上で、納得のいく退居先に移れるように支援している。退居事例がない場合は、その体制がある。	◎	有事には説明し、今後についての選択肢を提案している。	/	/	/		
III. 地域との支え合い										
39	地域とのつきあいやネットワークづくり ※文言の説明 地域：事業所が所在する市町の日常生活圏域、自治会エリア	a	地域の人に対して、事業所の設立段階から機会をつくり、事業所の目的や役割などを説明し、理解を図っている。	○	近隣には広報を配布したり、コロナ前には行事のお誘いにパンフレット等お届けしていた。	/	◎	/	コロナ禍において、事業所には面会などの制限が設けられ、地域との交流できる機会が減少している。コロナ禍においても、可能な地域の小学校や保育園との交流は継続しており、春には園児と玉ねぎの収穫をしたり、訪問調査月の10月には、芋掘りを利用者と一緒に行うことを予定している。令和4年の春には、地域住民を対象とした「認知症サポーター養成講座」を地区社協と協力して開催することもできた。また、近隣の住民には、しおり便りを持参するほか、食材の配達を依頼している商店に、事業所便りを掲示してもらうなど、事業所の経営や運営の理解促進に努めている。コロナ禍以前は、事業所で認知症カフェを開催して、地域住民に参加してもらったり、利用者と一緒に地域行事に参加したりすることもできていた。	
		b	事業所は、孤立することなく、利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、地域の人たちに対して日頃から関係を深める働きかけを行っている。(日常的なあいさつ、町内会・自治会への参加、地域の活動や行事への参加等)	○	コロナ前は、地域の清掃に参加したり、お祭りや、行事に声掛けし、関係作りをしていた。	/	△	○		
		c	利用者を見守ったり、支援してくれる地域の人たちが「増えている」。	△	見守ったり、支援してくれる人はいるが、限られた人達になっている。	/	/	/		/
		d	地域の人が気軽に立ち寄り遊びに来たりしている。	◎	コロナ前は夏祭りや認知症カフェに招待していた。風景画を描きに来る人もいた。	/	/	/		/
		e	隣近所の人と気軽に声をかけ合ったり、気軽に立ち寄ってもらうなど、日常的なおつきあいをしている。	△	挨拶を交わす程度。日常的に立ち寄ることはない。	/	/	/		/
		f	近隣の住民やボランティア等が、利用者の生活の拡がりや充実を図ることを支援してくれるよう働きかけを行っている。(日常的な活動の支援、遠出、行事等の支援)	○	ボランティア散髪に月1回来て頂き、散髪の支援を受けている。コロナ前はカラオケや、事演奏、笑いヨガ等、色々な働きかけをして頂いていた。	○	/	/		/
		g	地域の人たちや周辺地域の諸施設からも協力を得て、安全で豊かな暮らしができるよう、日頃から理解を拡げる働きかけや関係を深める取り組みを行っている(公民館、商店・スーパー・コンビニ、飲食店、理美容店、福祉施設、交番、消防、文化・教育施設等)。	◎	ボランティア散髪に月1回来て頂き、散髪の支援を受けている。コロナ前はカラオケや、事演奏、笑いヨガ等、色々な働きかけをして頂いていた。年1回の消防署参加の避難訓練も見送られている。現在は、保育園児の訪問や、地域の商店の移動販売に来て頂いている。	◎	/	/		/

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
40	運営推進会議を活かした取り組み	a	運営推進会議には、毎回利用者や家族、地域の人の参加がある。	○	コロナ前は地域の人や家族、他施設からの参加があったが、コロナが流行してから、資料を送付し、感想や意見など頂いている。	◎	/	○	コロナ禍において、運営推進会議は書面開催となっている。令和4年6月には、隣接するグループホームと合同で、約1年4か月ぶりに集合形式の会議を開催することができ、家族や地域住民、保育園、小学校、警察官、公民館、消防署、民生委員、地区社協、市担当者などと活発な意見交換を行うことができた。新たに、地域の消防団に会議の参加メンバーになってもらうことができたものの、地域の防災を話し合う機会までには至っていない。書面開催において、議事録を作成して市担当者には提出しているが、他の参加メンバーには、会議資料の送付のみに留まっているため、次回の会議資料等で、前回の会議報告の掲載を行うなど、議事録の周知も期待される。
		b	運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況(自己評価・外部評価の内容、目標達成計画の内容と取り組み状況等)について報告するとともに、会議で出された意見や提案等を活かした結果等も報告し、議事録を公表している。	○	利用者の日頃の活動報告や、ヒヤリハットの報告を行っている。また、外部評価の内容、目標達成計画の報告も行っている。	/	◎	○	
		c	テーマに合わせて参加メンバーを増やしたり、メンバーが出席しやすい日程や時間帯について配慮・工夫をしている。	△	テーマに合わせてメンバーを調整していない。また、日程や時間帯もこちらで決めてお知らせしている。	/	/	○	
IV.より良い支援を行うための運営体制									
41	理念の共有と実践	a	地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、代表者、管理者、職員は、その理念について共通認識を持ち、日々の実践が理念に基づいたものになるよう日常的に取り組んでいる。	○	玄関を入るとすぐ見えるところに理念を掲げている。また、各ユニットで、理念に沿った目標を決め、日常的に取り組んでいる。	/	/	/	
		b	利用者、家族、地域の人たちにも、理念をわかりやすく伝えている。	○	地域に配布しり広報誌にも記している。また、ボランティアや、見学に来られた人には説明している。	○	○	/	
42	職員を育てる取り組み ※文言の説明 代表者：基本的には運営している法人の代表者であり、理事長や代表取締役が該当するが、法人の規模によって、理事長や代表取締役をその法人の地域密着型サービス部門の代表者として扱うのは合理的ではないと判断される場合、当該部門の責任者などを代表者として差し支えない。したがって、指定申請書に記載する代表者と異なることはありうる。	a	代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、計画的に法人内外の研修を受けられるよう取り組んでいる。	△	コロナウイルス感染回避のため、研修の参加及び開催は見送っていた。オンラインでの研修も検討したが、ハード面の問題で開催を見送った。	/	/	/	年1回、法人の代表者と施設長が、職員との個別面談を行い、意見や要望などの聞き取りをしている。職員は、有給休暇や希望休が取得できるほか、誕生月にはリフレッシュ休暇を取得できるようになっている。また、夜勤時の20時には、敷地内に住む施設長が事業所内の巡回を行い、個別に夜勤職員と会話する機会を設けられ、職員との話しやすい関係づくりに努めている。コロナ禍以前は、懇親会などの福利厚生を図ることもできていたものの、現在は開催を自粛している。
		b	管理者は、OJT(職場での実務を通して行う教育・訓練・学習)を計画的に行い、職員が働きながらスキルアップできるように取り組んでいる。	○	異動時のソフトの工夫や、各種委員会の引継ぎ等できる限りOJTを行うようにしている。	/	/	/	
		c	代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている。	○	年に1回面談を行い、近況を把握している。各種手当についても説明し、口取得を促している。	/	/	/	
		d	代表者は管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互研修などの活動を通して職員の意識を向上させていく取り組みをしている。(事業者団体や都道府県単位、市町単位の連絡会などへの加入・参加)	△	コロナウイルス感染回避のため、このような機会への参加は見送っている。代表者レベルでの取り組みは市の協力のもとオンラインで参加している。	/	/	/	
		e	代表者は、管理者や職員のストレスを軽減するための工夫や環境づくりに取り組んでいる。	○	年に1回面談を行い、近況を把握している。夜勤時のラウンドで、日頃から1対1のコミュニケーションを取る機会を作っている。	○	○	○	
43	虐待防止の徹底	a	代表者及び全ての職員は、高齢者虐待防止法について学び、虐待や不適切なケアに当たるのは具体的にどのような行為なのかを理解したうえで、これらが見逃ごされることがないように注意を払い、発見した場合の対応方法や手順についても理解している。	○	研修に参加した職員が、学んだことを全体の会合で伝えている。また、不適切なケアなどを発見した場合には、速やかに上司に報告し、解決に繋げている。	/	/	○	事業所内で、職員は虐待防止などの研修を受けて、具体的に虐待や不適切なケアに当たる行為を理解している。中には、「ちょっと待って」などの大きな声を出す職員が見られることもある。また、不適切なケアなどを発見した場合には、職員同士で注意し合うとともに、注意が難しい場合には主任や管理者に伝えて、該当職員に確認の上で、注意喚起をしている。
		b	管理者は、職員とともに日々のケアについて振り返ったり話し合ったりする機会や場をつくっている。	○	管理者は、朝の申し送りや、ユニット会に参加し、日々のケアについて話し合っている。	/	/	/	
		c	代表者、管理者は職員の疲労やストレスが利用者へのケアに影響していないか日常的に注意を払い、点検している。	○	現場に入り、日々の様子を観察し、ちょっとした変化に気をつけている。	/	/	/	
44	身体拘束をしないケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が「指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」や「緊急やむを得ない場合」とは何かについて正しく理解している。	○	研修で学んだことを、ミーティングなど会合で全員に伝え、理解に努めている。	/	/	/	
		b	どのようなことが身体拘束に当たるのか、利用者や現場の状況に照らし合わせて点検し、話し合う機会をつくっている。	◎	申し送りやユニット会で話し合っている。身体拘束防止マニュアルを作成し、共有している。	/	/	/	
		c	家族等から拘束や施設長の要望があっても、その弊害について説明し、事業所が身体拘束を行わないケアの取り組みや工夫の具体的な内容を示し、話し合いを重ねながら理解を図っている。	○	家族の要望を理解した上で、拘束や施設することのリスクを説明し、できるだけ拘束しない支援方法を提案しながら、理解を図っている。	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
45	権利擁護に関する制度の活用	a	管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学び、それぞれの制度の違いや利点などを理解し、利用者が家族の現状を踏まえ、パンフレット等の情報提供や相談に乗る等の支援を行っている。	○	コロナ前は研修に参加し、理解に努めていた。また、成年後見人制度のテキストを見て、理解しようとしている職員もいる。家族への制度の情報提供は、施設長や管理者が相談に乗っている。				
		b	支援が必要な利用者が制度を利用できるよう、地域包括支援センターや専門機関(社会福祉協議会、後見センター、司法書士等)との連携体制を築いている。	◎	実際に後見人制度を利用している利用者もあり、連携体制は築けている。				
46	急変や事故発生時の備え・事故防止の取り組み	a	怪我、骨折、発作、のど詰まり、意識不明等利用者の急変や事故発生時に備えて対応マニュアルを作成し、周知している。	○	目につくところに貼っているが、全ての事態に対応できるものではない。				
		b	全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている。	○	定期的に研修や訓練を行っている。(コロナ禍で、外部から講師を呼ぶのは、難しくなっている)				
		c	事故が発生した場合の事故報告書はもとより、事故の一手前の事例についてもヒヤリハットにまとめ、職員間で検討するなど再発防止に努めている。	○	全てヒヤリハットにまとめ、職員間で検討し、再発防止に努めている。				
		d	利用者一人ひとりの状態から考えられるリスクや危険について検討し、事故防止に取り組んでいる。	◎	事故当日の出動で話し合いがなされ、毎月のミーティングでも検討している。				
47	苦情への迅速な対応と改善の取り組み	a	苦情対応のマニュアルを作成し、職員はそれを理解し、適宜対応方法について検討している。	△	マニュアルはあるが、職員は行っていない。すべて上司に繋ぎ対応している。				
		b	利用者や家族、地域等から苦情が寄せられた場合には、速やかに手順に沿って対応している。また、必要と思われる場合には、市町にも相談・報告等している。	○	施設長や管理者が対応している。必要に応じ、市町に相談、報告している。				
		c	苦情に対しての対策案を検討して速やかに回答するとともに、サービス改善の経過や結果を伝え、納得を得ながら前向きな話し合いと関係づくりを行っている。	○	代表、施設長、管理者で対策案を検討し、速やかに回答している。経過報告を伝えながら納得を得、良い関係に繋がっている。				
48	運営に関する意見の反映	a	利用者や家族が意見や要望、苦情を伝えられる機会をつくっている。(法人・事業所の相談窓口、運営推進会議、家族会、個別に訊く機会等)	△	コロナ前は、介護相談員が求設し、利用者に意見を聞く機会があった。家族会も行ってた。(現在中止中)できる限り職員や管理者が伺い、要望など叶えられるよう努めている。運営推進会議は2年間書面開催となり、機会は減っている。	◎		○	日常生活の中で、職員は利用者から意見や要望を聞き、可能な範囲で柔軟に対応をしている。コロナ禍以前は、年2回家族会を開催して、職員は家族から意見を聞くことができていたが、現在は、来訪時や電話連絡時などを活用して、意見を聞くよう努めている。また、管理者等は、日々の支援の中で職員の顔色などの気になる場合には、その都度声をかけて意見を聞くとともに、相談に応じている。さらに、職員は代表者や施設長にも意見を伝えやすい環境が整えられているほか、月1回実施する全体ミーティングやユニット会の中でも、管理者等は職員に意見はないかの確認をしている。
		b	契約当初だけではなく、利用者・家族等が苦情や相談ができる公的な窓口の情報提供を適宜行っている。	○	特に窓口は作っておらず、いつでも苦情や相談は受け付けている。家族等が納得していただけない場合は、市町に相談に行っている。				
		c	代表者は、自ら現場に足を運ぶなどして職員の意見や要望・提案等を直接聞く機会をつくっている。	○	日々の業務に加え、夜勤時にラウンドし意見や要望、提案をきいている。また、個人の面談も定期的に行っている。				
		d	管理者は、職員一人ひとりの意見や提案等を聴く機会を持ち、ともに利用者本位の支援をしていくための運営について検討している。	○	申し送りやミーティングだけでなく、日々意見や想いを伝えられる環境にある。				
49	サービス評価の取り組み	a	代表者、管理者、職員は、サービス評価の意義や目的を理解し、年1回以上全員で自己評価に取り組んでいる。	○	毎年自己評価を行い、サービス評価の意義や目的を理解するよう努めている。				外部評価の自己評価は、職員全員で取り組み、ユニット毎に管理者等が取りまとめて作成している。全体のミーティング等を活用して、サービスの評価結果や目標達成計画を職員に周知している。また、運営推進会議の参加メンバーや家族には、書面で評価結果や目標達成計画を送付して周知しているものの、目標達成への取り組みの途中経過までは報告できていない。コロナ禍の収束後には、取組みの状況の確認などのモニターを、会議の参加メンバーや家族に協力を呼びかけて意見をもらったり、運営推進会議の議題に、サービス評価を取り上げて、話し合いをしたりするなど、職員間で話し合い、工夫された取組みが行われることを期待したい。
		b	評価(自己・外部・家族・地域)の結果を踏まえて、事業所の現状や課題を明らかにするとともに、実現可能な目標達成計画を作成し、その達成に向けて事業所全体で取り組んでいる。	△	評価を通して、現状や課題は見えてくるが、それについて話し合う機会は少ない。また、目標達成計画を作成し、職員全員に周知しているが、達成に向けての取り組みは、コロナの関係もあり出来ていない。				
		c	評価結果と目標達成計画を市町、地域包括支援センター、運営推進会議メンバー、家族等に報告し、今後の取り組みのモニターをしてもらっている。	○	運営推進会議の際、メンバーに書面で報告し、家族にも書面を送付し、確認していただいている。	○	○	○	
		d	事業所内や運営推進会議等にて、目標達成計画に掲げた取り組みの成果を確認している。	△	取り組みの成果の確認はできていない。				

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
50	災害への備え	a	様々な災害の発生を想定した具体的な対応マニュアルを作成し、周知している。(火災、地震、津波、風水害、原子力災害等)	△	具体的なマニュアルは作成していないが、定期的に避難訓練を行い、意識づけしている。	/	/	/	敷地内にあるグループホームと合同で、様々な災害や場面を想定した避難訓練を実施している。地元消防団に、運営推進会議の資料を渡して意見を聞くなど、法人・事業所として、防災などを話し合う機会を設ける努力はしているものの、コロナ禍で話し合いまでに至っていない。また、平成30年7月豪雨災害では、大変な思いをした経験があるため、リスクや防災の委員会で話し合いや設備などの確認が行われている。今後は、運営推進会議の中で、消防署や警察、消防団、市担当者などを交えて、防災対策を話し合い、少しずつ地域住民との協力支援体制を構築できることを期待したい。
		b	作成したマニュアルに基づき、利用者が、安全かつ確実に避難できるように、さまざまな時間帯を想定した訓練を計画して行っている。	○	いろんなシチュエーションを想定し、定期的に訓練を行っている。	/	/	/	
		c	消火設備や避難経路、保管している非常用食料・備品・物品類の点検等を定期的に行っている。	◎	防災リスク委員会により定期的に点検を行っている。	/	/	/	
		d	地域住民や消防署、近隣の他事業所等と日頃から連携を図り、合同の訓練や話し合う機会をつくるなど協力・支援体制を確保している。	△	運営推進会議のメンバーに、地区の消防団の方がおり、協力は仰げるが、コロナの関係で話し合う機会を持っていない。年に1度は消防署と連携し、訓練を行っているが、それも今はできていない。	○	×	○	
		e	災害時を想定した地域のネットワークづくりに参加したり、共同訓練を行うなど、地域の災害対策に取り組んでいる。(県・市町、自治会、消防、警察、医療機関、福祉施設、他事業所等)	△	地域のネットワークづくりや、共同訓練には参加できていない。しかし市との連携は図れており、災害時の受け入れができる福祉施設として対策に取り組んでいる。	/	/	/	
51	地域のケア拠点としての機能	a	事業所は、日々積み上げている認知症ケアの実践力を活かして地域に向けて情報発信したり、啓発活動等に取り組んでいる。(広報活動、介護教室等の開催、認知症サポーター養成研修や地域の研修・集まり等での講師や実践報告等)	△	地域に毎月広報誌を配布している。コロナの前までは、認知症カフェや、行事のお誘いをして、啓蒙活動していたが、現在はほとんどできていない。	/	/	/	法人・事業所として、しおり便りを活用して、相談できることを地域住民へ広報啓発をしているものの、市内中心部には市役所や地域包括支援センターもあり、ほとんど相談は寄せられない状況となっている。コロナ禍以前は、笑みちゃんカフェ(認知症カフェ)を開催して、地域住民などの相談に応じることもできていたが、現在は休止している。また、地区社協と合同で、「認知症サポーター養成研修」の実施に協力して、法人の代表者と施設長が講師を務めている。さらに、市行政や地域包括支援センターなどの会議や研修に参加する機会は少ないものの、連携を図ることはできている。
		b	地域の高齢者や認知症の人、その家族等への相談支援を行っている。	○	事業所見学や、電話での相談など、いつでも受け付けている。地域の店舗にも広報誌を貼ってもらい、情報を提供している。	/	×	△	
		c	地域の人たちが集う場所として事業所を解放、活用している。(サロン・カフェ・イベント等交流の場、趣味活動の場、地域の集まりの場等)	△	以前は事業所を開放し、認知症カフェを定期的に行ったり、ボランティアの人達も頻繁に来ていたが、今はコロナの為できていない。	/	/	/	
		d	介護人材やボランティアの養成など地域の人材育成や研修事業等の実習の受け入れに協力している。	○	要望があれば受け入れている。障害者支援センターからの実習など。	/	/	/	
		e	市町や地域包括支援センター、他の事業所、医療・福祉・教育等各関係機関との連携を密にし、地域活動を協働しながら行っている。(地域イベント、地域啓発、ボランティア活動等)	△	町内清掃や、公民館のイベント、保育園や学校の行事に参加していたが、コロナ感染予防のため、いまはできていない。	/	/	○	

(別表第1)

サービス評価結果表

サービス評価項目

(評価項目の構成)

I. その人らしい暮らしを支える

- (1) ケアマネジメント
- (2) 日々の支援
- (3) 生活環境づくり
- (4) 健康を維持するための支援

II. 家族との支え合い

III. 地域との支え合い

IV. より良い支援を行うための運営体制

ホップ 職員みんなで自己評価!
 ステップ 外部評価でブラッシュアップ!!
 シャンプ 評価の公表で取組み内容をPR!!!

ーサービス向上への3ステップー

【外部評価実施評価機関】※評価機関記入

評価機関名	社会福祉協議会 愛媛県社会福祉協議会
所在地	愛媛県松山市持田町3丁目8番15号
訪問調査日	令和 4 年 10 月 19 日

【アンケート協力数】※評価機関記入

家族アンケート	(回答数) 11名	(依頼数) 18名
地域アンケート回答数	9名	

※事業所記入

事業所番号	3890300126
事業所名 (ユニット名)	グループホームしおり 空
記入者(管理者) 氏名	松岡 加代
自己評価作成日	令和 4 年 9 月 9 日

(別表第1の2)

<p>【事業所理念】 ・共に生きる 【ユニット理念】 <空色> ・空の色が毎日違って見えるように、 いろいろな意見や見方があるように、 ・さりげない手助けでいつもの暮らしを一番に。 ・柔軟で多彩な考え方で、虹色に輝ける空ユニットへ。</p>	<p>【前回の目標達成計画で取り組んだこと・その結果】 【取り組み】 ①運営推進会議や広報誌を活用し、避難訓練、救命救急講習会の実施や、避難・災害時の事業所の在り方等の情報を発信する。 ②地域の防災訓練に参加し、消防団や地域の方との情報交換を行い、事業所を知っていただく。 ③消防団や地域の方に運営推進会議への参加の誘いを働きかける。 【結果】 ①コロナ前までは、毎年AEDの使い方や救命救急の講習を受けていたが、感染予防の為、一昨年から、講習の実施は出来ていない。又、災害時の事業所の在り方として、当事業所を避難場所として提供している事業は、地域の方たちへは周知して頂いている。 ②地域の情報伝達訓練に参加したが情報交換は出来ていない。 ③コロナ感染が流行していた2年間は、運営推進会議は資料を送付し、地域の方、消防団にも目を通していただき、意見や要望を頂いていた。今後は会議にも参加して頂く方向で、働きかけていきたい。</p>	<p>【今回、外部評価で確認した事業所の特徴】 事業所の敷地は広く、度には芝生が植えられ、玉ねぎや芋などの野菜を育てる畑も整備されている。敷地内には、2つのグループホームが建てられ、渡り廊下で利用者が行き来できるようになっている。事業所は高台にあり、宇和島城などの眺めや市内の絶景を一望することができる。約1年半前に、法人内の人事異動により、新たな管理者に交代している。コロナ禍において、制限が設けられ、外出支援が思うようにできない状況に、管理者は心を痛めている。また、職員は利用者や家族の希望を叶えるために、写真のみの送付に留まらず、誕生日の月などには動画をDVDに保存して家族に送付するなど、家族との交流を継続させながら、利用者の近況が伝わりやすく伝える工夫をしている。さらに、事業所では、利用者により、ある生活支援に力を入れており、日中や夜間に着替えなどが行われている。近隣には、小学校や保育園があり、玉ねぎや芋ほりの野菜を利用者に収穫するなどの交流を継続することができている。加えて、令和4年の春には、地域住民を対象とした「認知症サポーター養成講座」を地区社協と共同開催するなど、地域に根付いた事業所となっている。</p>
--	---	---

評価結果表

【実施状況の評価】

◎よくできている ○ほぼできている △時々できている ×ほとんどできていない

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
I. その人らしい暮らしを支える									
(1) ケアマネジメント									
1	思いや暮らし方の希望、意向の把握	a	利用者一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。	○	ご自分で訴えることのできる方と、できない方では意向の把握にも差が出てしまっているが、可能な限り把握できるよう努めている。	◎	/	◎	入居時に、管理者等は利用者から思いや意向を聞くよう努めている。利用者の高齢化や重度化に伴い、意向の把握が難しくなっているが、職員は日常的な会話や以前話していた内容から、思いなどをくみ取った支援をしている。また、職員は支援中の利用者の表情やしぐさを観察するほか、面会に訪れた家族から意向を聞くこともある。
		b	把握が困難な場合や不確かな場合は、「本人はどうか」という視点で検討している。	○	本人の視点で、なぜそのような行動になるのかを考えるようにしている。	/	/	/	
		c	職員だけでなく、本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)とともに、「本人の思い」について話し合っている。	△	ケアプランの見直しや、更新の時に家族に電話にて、本人の思いについても話し合っているが、コロナ禍のため会う機会が少なく話合うところまでできていない。	/	/	/	
		d	本人の暮らし方への思いを整理し、共有化するための記録をしている。	○	ケアプランの更新月には、「共にいきる」シートを担当者が記入し、会議でも話し合っている。	/	/	/	
		e	職員の思い込みや決めつけにより、本人の思いを見落とさないように留意している。	○	勤務年数が長くなればなるほど決めつけをしちゃうことがある。新しい職員の目から見えての気づきを大切にしている。	/	/	/	
2	これまでの暮らしや現状の把握	a	利用者一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、こだわりや大切にしてきたこと、生活環境、これまでのサービス利用の経過等、本人や本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)から聞いている。	○	アセスメントシートを皆で共有し、新たに家族から得た情報は、ユニット会や申し送り共有している。	/	/	○	入居前に、管理者等は自宅や病院などを訪問し、利用者や家族から、生活歴や馴染みの暮らし方などを聞く事前調査を行うとともに、把握した情報はアセスメントシートに記録している。また、在宅から利用者が入居する場合には、以前利用していた介護サービス事業所や介護支援専門員から情報提供を受けることもある。さらに、入居時に、家族や知人から、新たな情報の聞き取りをしている。
		b	利用者一人ひとりの心身の状態(身体面・精神面)や有する力(わかること・できること・できそうなこと等)等の現状の把握に努めている。	△	努めているが、できないことの手助けだけでなく、できることで職員ができてしまっていることもある。	/	/	/	
		c	利用者一人ひとりの一日の過ごし方や24時間の生活の流れ・リズム等、日々の変化や違いについて把握に努めている。(生活環境・職員のかかわり等)	○	2hシートへの記入し、変化がある時は印を付けて、皆で把握に努めている。	/	/	/	
3	チームで行うアセスメント(※チームとは、職員のみならず本人・家族・本人をよく知る関係者等を含む)	a	把握した情報をもとに、本人が何を求め必要としているのかを本人の視点で検討している。	○	月1回のユニット会でモニタリングを通して検討している。	/	/	○	入居時には、事前に収集したアセスメント情報をもとに、職員間でカンファレンスを行い、より良いサービスを検討している。入居後も、定期的に利用者が何を求め必要としているのかなどを、利用者本人の意向をくみ取る視点で検討をしている。また、法人・事業所として、美化や行事、看護、防災、リスク、広報の委員会が設けられ、様々な視点で、サービスの質の向上に向けた話し合いが行われている。
		b	検討した内容に基づき、本人がより良く暮らすための課題の把握に努めている。	○	ユニット会で出た課題について、全員が共有できるよう記録に残し、課題の把握に努めている。	/	/	/	
4	チームでつくる本人がより良く暮らすための介護計画	a	本人の思いや意向、暮らし方が反映された内容になっている。	○	担当者が本人の意向を伺い、それに沿ったケアプランを立てている。	/	/	/	毎年のシルバー月間には、職員は利用者から、「元気でのおんぼり過ごしたい、孫にコロッケとちゃんぽんを作ってやりたい、家族のお墓参りに行きたい、旅行に行きたい」などの思いや意向を聞き、計画に反映して、実現できるように努めている。また、事前のアセスメントやモニタリングの情報をもとに、利用者や家族、関係者から出された意見を踏まえて、家族や職員と交えて話し合い、計画作成担当者が介護計画を作成している。「今まで通りでいいです」などの家族の意見が増え、意見は出されにくくなっている。
		b	本人がより良く暮らすための課題や日々のケアのあり方について、本人、家族等、その他関係者等と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映して作成している。	○	なるべく本人の意向に近づけてはいるが、職員の出勤数によっては業務優先になることもある。	◎	/	○	
		c	重度の利用者に対して、その人が慣れ親しんだ暮らし方や日々の過ごし方ができる内容となっている。	○	慣れ親しんだ生活に近い形で暮らして頂いているが、居室で過ごす時間が多い方もあり、メリハリのある生活とは言えない。本人の性格に合わせた内容になっている。	/	/	/	
		d	本人の支え手として家族や地域の人たちとの協力体制等が盛り込まれた内容になっている。	×	コロナ禍の為、地域との協力体制はできていない。	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
5	介護計画に基づいた日々の支援	a	利用者一人ひとりの介護計画の内容を把握・理解し、職員間で共有している。	○	毎日ケアプランに沿って支援できるよう、個人ファイルにプランを貼付し、チェックをしている。	/	/	/	○ 介護計画の内容は、利用者一人ひとりの個別ファイルに分かりやすく添付され、職員は毎日の記録時に、目標やサービス内容を確認できるようになっている。また、計画の支援内容に沿って、担当職員が要約書を作成するとともに、月1回実施するユニット会の中で、利用者の日々の支援内容や実施状況などの確認を行い、課題などを検討している。さらに、24時間支援記録を活用して、利用者の言動などが詳細に記載されている。
		b	介護計画にそってケアが実践できたか、その結果どうだったかを個別具体的に記録して職員間で状況確認を行うとともに、日々の支援につなげている。	○	担当者がモニタリングの記録を、ユニット会で報告し、経過や結果を、職員全員で共有して次の支援に繋げている。	/	/	/	
6	現状に即した介護計画の見直し	a	介護計画の期間に応じて見直しを行っている。	◎	半年に1回、見直しを行っている。また、体調の変化があり、支援内容の見直しが必要な時は、期間は関係なく見直しをしている。	/	/	/	◎ 入居後は、1か月で介護計画の見直しをするほか、以降は、介護計画の認定期間に合わせて、6か月に1回計画の見直しをしている。各利用者の担当職員が、利用者の現状を確認して、モニタリングを行うとともに、毎月実施するユニット会の中で、モニタリングの結果の報告し、職員間で情報を共有している。また、利用者の状態の変化が見られた場合には、家族や医療関係者に相談するとともに、職員間でカンファレンスを行い、新たな介護計画を作成している。
		b	新たな要望や変化がみられない場合も、月1回程度は現状確認を行っている。	○	月1回のユニット会で全体の現状維持確認を行っている。	/	/	/	
		c	本人の心身状態や暮らしの状態に変化が生じた場合は、随時本人、家族等、その他関係者等と見直しを行い、現状に即した新たな計画を作成している。	○	体調や、暮らしの状態に変化が生じた場合は、家族にも相談し、現状に即した介護計画に作り変えている。	/	/	/	
7	チームケアのための会議	a	チームとしてケアを行う上での課題を解決するため、定期的、あるいは緊急案件がある場合にはその都度会議を開催している。	○	毎月1回ユニット会を開催し、緊急時にはカンファレンスを行っている。	/	/	/	◎ 事業所全体で、毎月ミーティングを開催して、業務や行事などの情報共有を行うとともに、その後に分かれてユニット会を実施し、利用者のモニタリングや評価のほか、職員間で意見交換をしている。会議に参加しやすいように、事前に日程調整を行い、18時30分から、2時間程度の会議を実施するとともに、勤務以外の職員には手当を支給するなど、参加しやすいよう工夫されている。また、緊急案件のある場合には、法人の代表者や施設長、管理者に報告するとともに、その日の出勤職員を交えて話し合いをしている。参加できない職員には口頭で報告するほか、会議録を確認してもらうとともに、確認後には押印をしている。さらに、会議録の押印の有無の確認は主任が行い、全ての職員の押印が整った場合にはファイルに綴るなど、確実な情報伝達や共有に繋げている。
		b	会議は、お互いの情報や気づき、考え方や気持ちを率直に話し合い、活発な意見交換ができるよう雰囲気や場づくりを工夫している。	○	職員一人一人が意見を出せるような雰囲気作りができています。意見に対しては否定はせず、前向きに意見交換できている。	/	/	/	
		c	会議は、全ての職員を参加対象とし、可能な限り多くの職員が参加できるよう開催日時や場所等、工夫するとともに、参加できない職員にも内容を正確に共有している。	○	月1回の会議には都合上参加できない職員もいるが、正規職員は殆ど参加できている。参加できなかった職員は、議事録を確認し、内容を把握している。	/	/	/	
8	確実な申し送り、情報伝達		日々の申し送りや情報伝達を行い、重要な情報は全ての職員に伝わるようにしている。(利用者の様子・支援に関する情報・家族とのやり取り・業務連絡等)	◎	日誌、連絡ノート、申し送りで伝えている。	/	/	/	○ 日々の申し送り時は、日誌のほか、重要事項を記載した連絡ノート、24時間シートを活用して、職員間で伝達をしている。
(2) 日々の支援									
9	利用者一人ひとりの思い、意向を大切に支援	a	利用者一人ひとりの「その日したいこと」を把握し、それを叶える努力を行っている。	△	業務多忙により、限られた人数のみになってしまっている。同じパターンを繰り返す状況になっている。	/	/	/	◎ 職員は「散歩に行きませんか、花を見に行きませんか」など、着替えや散歩の誘い方などの工夫した声かけを行い、利用者自身で意思決定できるよう支援している。また、職員は利用者のできることや得意なことを把握して、裁縫が得意な利用者には、職員からボタン付けや雑巾縫いをお願いすることもあり、手伝ってもらった場合には感謝の言葉を伝えている。さらに、天気の良い日には、お弁当を作って利用者と一緒に庭で食べるなど、笑顔で生き生きとした楽しみのある生活が送れるよう支援している。
		b	利用者が日々の暮らしの様々な場面で自己決定する機会や場をつくらせている。(選んでもらう機会や場をつくる、選ぶのを待っている等)	○	朝提供する飲み物や、入浴の時間など、選んでもらう場をつくっている。	/	/	/	
		c	職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースや習慣を大切に支援を行っている。(起床・就寝、食事・排泄・入浴等の時間やタイミング・長さ等)	△	一人ひとりのペースや生活習慣を大切にしているが、共同生活で、どうしても職員側の都合に合わせてしまう時がある。	/	/	/	
		d	利用者の活き活きした言動や表情(喜び・楽しみ・うるおい等)を引き出す言葉がけや雰囲気づくりをしている。	○	笑顔と、明るい声掛けでコミュニケーションを取るよう心がけている。挨拶もきちんと顔を見て、目を合わせ行っている。	/	/	/	
		e	意思疎通が困難で、本人の思いや意向がつかめない場合でも、表情や全身での反応を注意深くキャッチしながら、本人の意向にそった暮らしができるよう支援している。	○	日頃のかかわりの中で、表情や言動から意向をつかむよう努めている。	/	/	/	
10	一人ひとりの誇りやプライバシーを尊重した関わり	a	職員は、「人権」や「尊厳」とは何かを学び、利用者の誇りやプライバシーを大切に言葉かけや態度等について、常に意識して行動している。(人前であからさまな介護や誘導の声かけをしないよう配慮、目立たずさりげない言葉かけや対応等)	○	人権や、尊厳についてミーティング等で上司から話があったり、諸先輩からの指導もあり、常日頃から意識しており、さりげない言葉かけや、対応に努めている。	/	/	/	◎ 職員は、人権や尊厳などを研修で学び、利用者の誇りやプライバシーを大切に言葉かけや態度などを理解して、実践している。特に、排泄には気を配り、もぞもぞしたり、立ち上がろうとする利用者には、職員が羞恥心などに配慮して、さりげないトイレ誘導をしている。中には、歩行器を使用せずに歩いている利用者には、「ちょっと待って、歩行器使って」などと大きな声を出したり、素手で食事を摂っていた利用者には、「それはダメ」などと、叱咤に大きな声を出してしまう職員も見られ、管理者等は該当職員に注意喚起をしている。また、居室に入る場合には、職員が利用者に声をかけて入室するとともに、不在時にも、必ず事前に許可を得た上で入室することができる。
		b	職員は、排泄時や入浴時には、不安や羞恥心、プライバシー等に配慮しながら介助を行っている。	○	失禁を確認した場合や、トイレで失敗した場合など、さりげなくトイレに誘導したり、入浴の際はタオルで体を隠しながら不安や羞恥心を感じないように配慮している。	/	/	/	
		c	職員は、居室は利用者専用の場所であり、プライバシーの場所であることを理解し、居室への出入りなど十分配慮しながら行っている。	○	訪室した際は、ノックをしたり声掛けをして入室している。	/	/	/	
		d	職員は、利用者のプライバシーの保護や個人情報漏えい防止等について理解し、遵守している。	◎	職員は全員個人情報漏えい防止について理解しており、第3者には漏らすことはない。	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
11	ともに過ごし、支え合う関係	a	職員は、利用者を介護される一方の立場におかず、利用者に助けてもらったり教えてもらったり、互いに感謝し合うなどの関係性を築いている。	◎	共同生活の中で、家事などできる事は手伝っていただき、感謝の言葉を伝えている。若い職員は、編み物など教えて頂く場面もあり、互いに関係性を築いている。	/	/	/	新たに利用者が入居した場合には、世話好きで話しかけてくれる他の利用者にも、職員が「お願しますね」などと声をかけ、利用者同士の仲を取り持つ支援に努めている。また、職員は利用者同士の関係性を把握して、配席を考慮するなどの対応を行い、トラブルが起こらないよう支援している。さらに、仲の良い、性格の似た利用者同士と一緒に過ごせるように座席を配慮するとともに、職員は様子の見守りをしている。
		b	職員は、利用者同士がともに助け合い、支え合って暮らしていくことの大切さを理解している。	○	職員は利用者同士が一つの家族となり、できない部分を担ったり、支えあって暮らしていくことの大切さを理解し、そのように声掛けをしている。	/	/	/	
		c	職員は、利用者同士の関係を把握し、トラブルになったり孤立したりしないよう、利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている。(仲の良い利用者同士が過ごせる配慮をする、孤立しがちな利用者が交わる機会を作る、世話役の利用者にうまく力を発揮してもらう場面をつくる等)。	○	利用者同士の関係性の把握に努めている。トラブルにならないよう座席の位置を決めたり、仲の良い利用者がゆっくり話ができるよう、くつろげるスペースを作るなど配慮している。しかし、強い難聴のある利用者は孤立してしまう場合もある。	/	/	○	
		d	利用者同士のトラブルに対して、必要な場合にはその解消に努め、当事者や他の利用者に不安や支障を生じさせないようにしている。	○	それぞれの利用者に場所を変えて話を聞き、他の利用者に支障が出ないようにしている。また、職員がゲームや話で場面を変え、気分転換を図っている。	/	/	/	
12	馴染みの人や場との関係継続の支援	a	これまで支えてくれたり、支えてきた人など、本人を取り巻く人間関係や馴染みの場所などについて把握している。	△	主にキーパーソンになる家族から、人間関係や馴染みの場所などは伺っている。	/	/	/	
		b	知人や友人等が気軽に訪れたり、本人が知人や友人等に会いに行ったり、馴染みの場所に出かけていったりなど、これまで大切にしてきた人や場所との関係が途切れないよう支援している。	△	コロナ禍により面会や外出ができない為、できていない。電話ができる利用者は、電話で友人や知人と話すことで関係は続いている。	/	/	/	
13	日常的な外出支援	a	利用者(および意思表示が困難な場合はご家族)の希望に沿って、戸外に出かけられるよう取り組んでいる。(職員側の都合を優先したり、外出する利用者、時間帯、行き先などが固定していない) (※重度の場合は、戸外に出て過ごすことも含む)	△	天候の良い日は、敷地内を散歩し、日光浴を行っている。以前は本人の希望に沿って、墓参りや散髪など行っていたが今はコロナ禍のため、戸外に出かけることはない。	○	x	○	コロナ禍において、事業所には外出制限が設けられているものの、日頃から敷地内の広い庭を散歩したり、天気の良い日は庭でお弁当やおやつを食べたりするなど、戸外に出て、利用者が気分転換を図れるよう支援している。また、重度の利用者も、車いすを使用して、散歩や外気に触れられるような支援に努めている。さらに、利用者から要望が出され、感染状況を見計らいながら、お墓参りに出かけられるよう支援したこともある。
		b	家族、地域の人やボランティア、認知症サポーター等の協力も得ながら、外出支援をすすめている。	x	コロナ禍のためできていない。	/	/	/	
14	心身機能の維持、向上を図る取り組み	a	職員は認知症や行動・心理症状について正しく理解しており、一人ひとりの利用者の状態の変化や症状を引き起こす要因をひもとき、取り除くケアを行っている。	○	研修で学んだり、利用者一人一人の思いに耳を傾け、要員や背景を探り、ケアに繋げている。	/	/	/	時間的な余裕があれば、職員は利用者自身に着替えや靴を履くなどのことができることを自分でしてもらい、見守りや待つ介護に努めている。時には、時間の余裕がなく、職員がつい手を出し、手伝ってしまうことも見られる。訪問調査日には、歩行器を使用して歩行訓練をしている利用者を、職員が後方から見守りしている様子を見ることができた。空ユニットでは、利用者の高齢化や認知症の進行に伴い、身体が動かさずらく、できることが少なくなってきた。また、日頃から散歩や体操のほか、調理、洗濯物たたみ、トイレへ自分で行くなどの生活リハビリを取り入れて、職員は利用者の心身機能の維持に努めている。中には、職員としりとりをしながら、笑顔で歩行練習を楽しみながら行う利用者もいる。
		b	認知症の人の身体面の機能低下の特徴(筋力低下・平衡感覚の悪化・排泄機能の低下・体温調整機能の低下・嚥下機能の低下等)を理解し、日常生活を営む中で自然に維持・向上が図れるよう取り組んでいる。	○	毎日の体操や散歩を取り入れ機能低下の予防や、口腔体操を続け、嚥下機能の低下を予防している。また排泄も、できる限りトイレで行えるよう取り組んでいる。	/	/	/	
		c	利用者の「できること、できそうなこと」については、手や口を極力出さずに見守ったり一緒に行うようにしている。(場面づくり、環境づくり等)	○	できるだけ見守りながら本人に行っていたくようにしているが、手伝う場面も多々ある。	○	/	○	
15	役割、楽しみごと、気晴らしの支援	a	利用者一人ひとりの生活歴、習慣、希望、有する力等を踏まえて、何が本人の楽しみごとや役割、出番になるのかを把握している。	○	家族から習慣や有する力を聞き取りし、日常生活で役割を担っていただいている。職員も把握しており、出番になる場面を作っている。	/	/	/	洗濯物たたみや掃除、調理の手伝い、花の水やり、野菜づくりなど、職員は利用者にも役割を担ってもらえるよう支援するとともに、手伝ってもらった後には、感謝の言葉を伝えている。裁縫の得意な利用者には、ボタン付けや雑巾を縫ってもらうこともある。また、食材を玄関から台所まで運んだり、新聞を取りに行ったりすることを日課の役割としている利用者もあり、職員は少しでもできる役割を担ってもらえるよう取り組んでいる。
		b	認知症や障害のレベルが進んでも、張り合いや喜びのある日々を過ごすように、日常的に、ホームの内外で一人ひとりの楽しみごとや役割、出番をつくる取り組みを行っている。	○	認知症が進んでいても体が動く方には掃除や洗濯ものたたみなど役割を担って頂いている。	◎	○	◎	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと	
16	身だしなみやおしゃれの支援	a	身だしなみを本人の個性、自己表現の一つと捉え、その人らしい身だしなみやおしゃれについて把握している。	○	自立のかたはそ人らしい身だしなみをしているが、認知症がすすみ、決まれない方は職員が季節に合った服や、身だしなみを整えている。				各ユニットに、2名ずつの食事介助が必要な利用者があり、職員は見守りやサポートを行うほか、食べこぼしなどをさげなくフォローをしている。また、入浴時などの着替えも、利用者の意向に沿って行うとともに、重度な利用者にも、夜はパジャマに着替えて、日中には普段着に着替えてもらうなど、メリハリのある生活が送れるよう支援している。さらに、男性利用者には声をかけ、電気シェイバーを使用して髭剃りを自身で行ってもらい、職員は剃り残しの確認やサポートをしている。	
		b	利用者一人ひとりの個性、希望、生活歴等に応じて、髪形や服装、持ち物など本人の好みに整えられるように支援している。	○	馴染みのある服や、持ち物を使用している。					
		c	自己決定がしにくい利用者には、職員と一緒に考えたりアドバイスする等本人の気持ちにそって支援している。	○	自己決定が難しい利用者は、一緒に会話しながら選んでいる。					
		d	外出や年中行事等、生活の彩りにあわせてその人らしい服装を楽しめるよう支援している。	○	行事や家族と懇話会やリモート面会をする際、その人らしい服装ができています。					
		e	整容の乱れ、汚れ等に対し、プライドを大切にできなくカバーしている。(髭、着衣、履き物、食べこぼし、口の周囲等)	○	自尊心を傷つける事が無いよう、小声で誘導するよう気を付けている。	◎	○	○		
		f	理容・美容は本人の望む店に行けるように努めている。	×	以前は家族の協力を得たり、職員が行っていたが、現在はコロナのためできていない。					
		g	重度な状態であっても、髪形や服装等本人らしさが保てる工夫や支援を行っている。	○	重度になっても、場面や状況に合わせて、髪型や服装には気を配っている。					○
		h	職員は、食事の一連のプロセスの意味や大切さを理解している。	◎	食事介助の必要な方は、何を食べているか説明しながら、食べていることを認識できるよう行っている。					
17	食事を楽しむことのできる支援	a	買い物や献立づくり、食材選び、調理、後片付け等、利用者とともに進んでいる。	△	献立は栄養士の資格を持つ施設長が立てているが、行事や誕生会などは利用者から希望を聞き調理している。一緒に進んだり、片付けは最近では出来ない。				○	
		b	利用者とともに買い物、調理、盛り付け、後片付けをする等を行うことで、利用者の力の発揮、自信、達成感につなげている。	×	以前は魚屋の異動販売が来た時など、一緒に選んでいたが、利用者の重度化が進み、最近では出来ない。					
		c	利用者一人ひとりの好きなものや苦手なもの、アレルギーの有無などについて把握している。	○	好みや苦手な物、アレルギーの有無は事前に情報収集し、職員皆が把握している。					
		d	献立づくりの際には、利用者の好みや苦手なもの、アレルギー等を踏まえつつ、季節感を感じさせる旬の食材や、利用者にとって音つかしいもの等を取り入れている。	○	地域の八百屋や魚屋から、その時期の旬の食材を買ったり、イベント毎にメニューを考えている。				○	
		e	利用者一人ひとりの咀嚼・嚥下等の身体機能や便秘・下痢等の健康状態にあわせて調理方法としつつ、おいしそうな盛り付けの工夫をしている。(安易にミキサー食や刻み食で対応しない、いろどりや器の工夫等)	○	刻み食であっても、他と同じような彩りになるよう盛り付けし、「これは〇〇ですよ」等、何かわかるように声掛けしている。					
		f	茶碗や湯飲み、箸等は使い慣れたもの、使いやすいものを使用している。	○	箸は一人ひとり決めている。また、湯飲みも一部の方が決まったものを使っている。				○	
		g	職員も利用者と同じ食卓を囲んで食事を一緒に食べながら一人ひとりの様子を見守り、食事のペースや食べ方の混乱、食べこぼしなどに対するサポートをさげなく行っている。	◎	同席して、同時に食べるようにし、嘔吐めやむせがないよう気を付けている。また、食べこぼしなどに気をつけることのないよう、声掛けしている。				◎	
		h	重度な状態であっても、調理の音やにおい、会話などを通して利用者が食事が待ち遠しくおいしく味わえるよう、雰囲気づくりや調理に配慮している。	◎	重度な状態であっても、早目にリビングに出て、食事の準備を見てもらい雰囲気づくりに努めている。食事前には口腔体操を行い、食べる準備を整えている。	◎			◎	
		i	利用者一人ひとりの状態や習慣に応じて食べられる量や栄養バランス、カロリー、水分摂取量が1日を通じて確保できるようにしている。	◎	毎日、水分補給の時間を決め水分摂取している。また、毎回の食事量を記録し、職員全員で把握し、不足していれば栄養補助食品等で、補給している。					
		j	食事量が少なかったり、水分摂取量の少ない利用者には、食事の形態や飲み物の工夫、回数やタイミング等工夫し、低栄養や脱水にならないよう取り組んでいる。	◎	こまめに水分補給を行ったり、飲みみにくい方には、アイスクリームや氷を提供している。また、高カロリーの栄養補助食品も提供する場面もある。					
		k	職員で献立のバランス、調理方法などについて定期的に話し合い、偏りがないように配慮している。場合によっては、栄養士のアドバイスを受けている。	○	栄養士の資格を持つ施設長が、献立を立てており、バランスにきにも良い。				○	
		l	食中毒などの予防のために調理用具や食材等の衛生管理を日常的に行い、安全で新鮮な食材の使用と管理に努めている。	◎	清潔な調理器具を使い、まな板は定期的に次亜塩素酸で消毒している。また、調理するものはたくさん作らず、一度に食べる量を作っている。					
		m								

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
18	口腔内の清潔保持	a	職員は、口腔ケアが誤嚥性肺炎の防止につながることを知っており、口腔ケアの必要性、重要性を理解している。	◎	訪問診療をしていただいている歯科医より毎月助言を頂き、職員全員が確認し、口腔ケアに取り入れている。	/	/	/	歯科医などに指示やアドバイスをもらい、職員は口腔ケアの重要性を理解している。毎食後に、職員は声をかけて、居室にある洗面台で、利用者は口腔ケアを実施している。必要に応じて、職員は見守りやサポートをしている。定期的に、職員は全ての利用者の口腔内の健康状態を確認して把握することができているが、アセスメントシートなどへ記録するまでには至っていないため、記録が残せることを期待したい。また、年1回歯科医による定期検診が行われているほか、定期的に訪問歯科診療を受診している利用者もいる。
		b	利用者一人ひとりの口の中の健康状況(虫歯の有無、義歯の状態、舌の状態等)について把握している。	○	食後の口腔ケアの際、異常に気付いたら、看護師に伝え、助言をいただいている。また、職員にも申し送りで伝達し、共有している。しかし、なかなか口を開けず確認し難い利用者もいる。	/	/	○	
		c	歯科医や歯科衛生士等から、口腔ケアの正しい方法について学び、日常の支援に活かしている。	◎	訪問診療をしていただいている歯科医より毎月助言を頂き、職員全員が確認し、口腔ケアに取り入れている。	/	/	/	
		d	義歯の手入れを適切に行えるよう支援している。	○	手順のわからない利用者には、付き添い説明したり、手伝ったりしている。できない場合は職員が行っている。	/	/	/	
		e	利用者の力を引き出しながら、口の中の汚れや臭いが生じないように、口腔の清潔を日常的に支援している。(歯磨き・入れ歯の手入れ・うがい等の支援、出血や炎症のチェック、歯科医の受診等)	◎	毎食後声掛けし、可能な範囲ご本人に任せているが、足りない所は介助している。定期的な受診に加え、不具合を確認したら、その都度報告し、対応している。	/	/	○	
19	排泄の自立支援	a	職員は、排泄の自立が生きる意欲や自信の回復、身体機能を高めることにつながることや、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)の使用が利用者の心身に与えるダメージについて理解している。	◎	ユニット会などで定期的に話し合い、状態に合わせて選んでいる。使用に関してはできるだけ必要最低限の使用を心がけている。	/	/	/	事業所では、基本的に利用者がトイレで排泄できるよう支援している。毎月実施するユニット会の中で、利用者の排泄支援の状況を話し合うとともに、状態に合わせて、適切な紙パンツやパッドなどの排泄用品の使用の検討を行い、家族に相談の上で使用している。中には、浴室と繋がっているトイレもあり、汚れや洗浄が必要な場合には、支援を行いやすい建物の構造となっている。また、散歩や運動のほか、水分補給、軟便剤などを取り入れ、利用者が自然排便が行えるよう支援している。
		b	職員は、便秘の原因や及ぼす影響について理解している。	○	研修で知識を得たり、Drや看護師から助言を頂いている。	/	/	/	
		c	本人の排泄の習慣やパターンを把握している。(間隔、量、排尿・排便の兆候等)	○	排便は量、形状を記録し、いつでも確認できるようにしている。	/	/	/	
		d	本人がトイレで用を足すことを基本として、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)使用の必要性や適切性について常に見直し、一人ひとりのその時々状態にあった支援を行っている。	◎	安易なおむつに変えるのではなく、申し送りやミーティングでを活用し、おむつが本当に本人にとって必要か、適切かを話し合い、検討して支援に繋いでいる。	◎	/	◎	
		e	排泄を困難にしている要因や誘因を探り、少しでも改善できる点はないか検討しながら改善に向けた取り組みを行っている。	◎	看護師に相談しながら、水分飛球や服薬、運動など取り入れている。	/	/	/	
		f	排泄の失敗を防ぐため、個々のパターンや兆候に合わせて早めの声かけや誘導を行っている。	○	決まった時間にトイレに誘導し、それ以外でも臨機応変に対応している。	/	/	/	
		g	おむつ(紙パンツ・パッドを含む)を使用する場合は、職員が一方的に選択するのではなく、どういう時間帯にどのようなものを使用するか等について本人や家族と話し合い、本人の好みや自分で使えるものを選択できるよう支援している。	○	ミーティングで話し合い、家族の了承を得て、本人に提案している。無理強いはいしないよう気を付けている。	/	/	/	
		h	利用者一人ひとりの状態に合わせて下着やおむつ(紙パンツ・パッドを含む)を適時使い分けしている。	◎	尿量等把握して、昼間、夜間と使い分けしている。	/	/	/	
		i	飲食物の工夫や運動への働きかけなど、個々の状態に応じて便秘予防や自然排便を促す取り組みを行っている。(薬に頼らない取り組み)	△	できるだけ水分補給に取り組んでいるが、便秘が続くと薬に頼ることも多い。	/	/	/	
20	入浴を楽しむことができる支援	a	曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、利用者一人ひとりの希望や習慣にそって入浴できるよう支援している。(時間帯、長さ、回数、温度等)	○	出来る限り希望の時間に浴うようにしているが、夜間を希望する利用者には足浴などで対応している。	◎	/	○	事業所の1階には個別浴槽が設置されているほか、2階には機械浴槽が設置され、利用者の状態に応じて使い分け、安心安全な入浴を支援している。毎日10時から15時までの時間帯には、利用者は自由に入浴することができ、最低でも週2回以上入浴できる機会を確保している。中には、毎日入浴を希望する利用者もおり、希望通りに対応することもできている。また、入浴を拒む利用者もおり、時間変更や声かけの工夫を行い、職員は入浴してもらえるよう支援している。
		b	一人ひとりが、くつろいだ気分で入浴できるよう支援している。	○	利用者のペースに合わせ見守り、介助を行っている	/	/	/	
		c	本人の力を活かしながら、安心して入浴できるよう支援している。	◎	できる所は本人にしてもらっている。背中、頭など、介助が必要なところは、雑談をしながら手伝っている。	/	/	/	
		d	入浴を拒む人に対しては、その原因や理由を理解しており、無理強いせずに気持ち良く入浴できるよう工夫している。	○	納得されるまで説明している。歌を歌うなど、楽しい雰囲気作りをしている。	/	/	/	
		e	入浴前には、その日の健康状態を確認し、入浴の可否を見極めるとともに、入浴後の状態も確認している。	◎	入浴前にバイタルチェックし、表情等も観察している。また、入浴後は必ず水分補給をし、わずかな変化にも気を配っている。	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
21	安眠や休息の支援	a	利用者一人ひとりの睡眠パターンを把握している。	○	夜間帯の行動や入眠、起床時間を記録し、申し送りで報告を聞いている。また、休みだった職員は記録を見て把握している。	/	/	/	事業所では、入居前からの継続も含めて、半数以上の利用者が眠剤を服用している。中には、運動や散歩などの日中の活動量を増やしたり、日光浴を取り入れたりすることで、服薬の量を減らすことのできた利用者もいる。また、夜間の転倒などの危険を回避するために、医師と相談して、服薬の量が追加された利用者もいる。現在は、ほとんどの利用者が、夜間に良眠することができている。
		b	夜眠れない利用者についてはその原因を探り、その人本来のリズムを取り戻せるよう1日の生活リズムを整える工夫や取り組みを行っている。	△	昼寝の時間を調整している。できるだけ日中、レクや趣味活動を行い、活動的に生活できるよう取り組んでいる。	/	/	/	
		c	利用者の数日間の活動や日中の過ごし方、出来事、支援内容などを十分に検討し、医師とも相談しながら総合的な支援を行っている。	○	日中の活動状況や、出来事を職員と看護師が相談し医師に相談しながら薬の処方を行っている。	/	/	○	
		d	休息や昼寝等、心身を休める場面が個別に取れるよう取り組んでいる。	◎	本人の体調や、その日の過ごし方で、個別に休んで頂いている。	/	/	/	
22	電話や手紙の支援	a	家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている。	○	希望があった場合職員が取り次いでいる。年賀状や、暑中見舞いなど、折に触れハガキを作成し、家族に送っている。	/	/	/	
		b	本人が手紙が書けない、電話はかけられないと決めつけず、促したり、必要な手助けをする等の支援を行っている。	○	本人が書けない場合は、職員と一緒に折り紙を貼ったり、簡単な絵を描くなど、少し手伝ってできる事をしていただいている。	/	/	/	
		c	気兼ねなく電話できるよう配慮している。	○	利用者の希望する時間帯に対応している。携帯や子機を利用して、他者から離れた場所で話せるよう配慮している。	/	/	/	
		d	届いた手紙や葉書をそのままにせず音信がとれるように工夫している。	△	見えにくい利用者には読み聞かせている。返事を出せる利用者が少なく、そのままになっていることが多い。	/	/	/	
		e	本人が電話をかけることについて家族等に理解、協力してもらうとともに、家族等からも電話や手紙をくれるようお願いしている。	○	家族等から気持ちよく協力は得られている。	/	/	/	
23	お金の所持や使うことの支援	a	職員は本人がお金を所持すること、使うことの意味や大切さを理解している。	○	今は使用する機会はないが、利用者の希望する管理方法で購入時は利用者の意思を尊重している。	/	/	/	
		b	利用者が気兼ねなく安心して買い物ができるよう、日頃から買い物先の理解や協力を得る働きかけを行っている。	×	以前は一緒に出掛け、買い物をしていたが、最近ではコロナ禍でできていない。職員、または家族が代行で買ってきている。	/	/	/	
		c	「希望がないから」「混乱するから」「失くすから」などと一方的に決めてしまうのではなく、家族と相談しながら一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している。	×	職員の人数が減っているため、一人一人の希望に応じられない。また、コロナの為外出が困難で、お金を使う支援ができない。	/	/	/	
		d	お金の所持方法や使い方について、本人や家族と話し合っている。	△	入所時に説明している。金額にもよるが、お金を使う場合、その都度家族に連絡している。	/	/	/	
		e	利用者が金銭の管理ができない場合には、その管理方法や家族への報告の方法などルールを明確にしており、本人・家族等の同意を得ている。(預り金規程、出納帳の確認等)。	○	入所時に話し合っている。預かる際は、預り証を私、来訪時、出納帳にサインをもらっている。また、出納帳は毎月家族に郵送し、確認をしてもらっている。	/	/	/	
24	多様なニーズに応える取り組み		本人や家族の状況、その時々ニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる。	○	本人のニーズに応えられるよう、家族とも相談し、協力を仰ぎ柔軟な支援を心がけている。コロナ前には墓参りに同行したり、外泊等も行ってた。	◎	/	◎	コロナ禍において、事業所には外出や面会などの制限が設けられ、可能な範囲で柔軟に対応をしている。利用者から「お墓参りに行きたい」という要望を叶えるため、事業所では感染状況を見計らいながら、家族に協力してもらい、お墓参りに出かけるなどの対応を行い、利用者や家族から大変喜ばれている。
(3) 生活環境づくり									
25	気軽に入れる玄関まわり等の配慮		利用者や家族、近隣の人等にとって親しみやすく、気軽に入りができるように、玄関や建物周囲の工夫をしている。	○	菜園、樹木、草花を多く取り入れ、広々と自然豊かな空間造りをしている。	◎	◎	◎	事業所の敷地内は広く、駐車場から玄関まで、芝生の庭を歩きながら、利用者や来訪者は季節の木々の緑や咲いた花を感じることができるようになっている。また、来訪者をセンサーチャイムで知らせてくれ、職員が出迎えなどの対応もしている。

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
26	居心地の良い共用空間づくり	a	共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)は、家庭的な雰囲気有しており、調度や設備、物品や装飾も家庭的で、住まいとしての心地良さがある。(天井や壁に子供向けの飾りつけをしていたり、必要なものが置いていない殺風景な共用空間等、家庭的な雰囲気をそくような設えになっていない等。)	○	家庭的な調度を多く揃え、色合いも柔らかく落ち着いたものを選んでいる。花や絵画を飾り、殺風景にならないようにしている。	◎	◎	◎	玄関は広く、目につく場所に、職員の顔写真が貼られたウエルカムボードが設置され、来訪者を出迎えてくれる。玄関ホールには、ソファやテーブルセットが置かれ、利用者や来訪者はくつろげるようになっている。また、正面の壁には各ユニットの利用者の長寿番付付と、利用者一人ひとりのしてみたいことが大きく書かれた紙が貼り出されていた。壁には、ハロウィンなどの季節の飾り付けが行われているほか、習字や俳句などの利用者の作品も飾られている。さらに、共有部分は整理整頓され、清掃や消毒、換気も行き届き、居心地の良い空間となっている。加えて、事業所内には家族が宿泊できる部屋も用意されている。敷地内には畑もあり、野菜づくりをしている利用者もいる。
		b	利用者にとって不快な音や光、臭いがないように配慮し、掃除も行き届いている。	○	掃除、消毒、環境整備は常に心掛けている。時間を決め、換気も行っている。			◎	
		c	心地よさや能動的な言動を引き出すために、五感に働きかける様々な刺激(生活感や季節感を感じるもの)を生活空間の中に採り入れ、居心地よく過ごせるよう工夫している。	○	季節に合わせて毎月掲示物を作成している。季節の草花や野菜を栽培したり、一緒に収穫して変化ある空間作りをしている。			◎	
		d	気の合う利用者同士で思い思いに過ごせたり、人の気配を感じながらも独りになれる居場所の工夫をしている。	△	階下にソファを設置し、共有古悪寒があるが、見守りが難しいため活用できていない。				
27	居心地良く過ごせる居室の配慮		本人や家族等と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている。	○	使い慣れた物、馴染みのある家具、家族の写真などを置き、ご自分の家にいるような、居心地よい環境にしている。	◎		◎	居室には、ベッドや布団、エアコン、押し入れ、洗面台が備え付けられている。中には、エアロバイクや加湿器、テレビ、扇風機、家族の写真を持ち込み、居心地の良い空間づくりをしている利用者もいる。また、持ち込んだ物を含めて、すっきりと整理整頓されている居室も多い。
28	一人ひとりの力が活かせる環境づくり	a	建物内部は利用者一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、混乱や失敗を防ぎ、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように配慮や工夫をしている。	○	各居室にネームプレートを設置し、自分の部屋とわかるようにしている。トイレ、浴室にはマークをつけて分かり易くしている。			○	各居室の入り口には、利用者の写真と年齢が記載された職員手作りのネームプレートが設置され、利用者が居室を認識しやすいよう工夫されている。また、トイレには、大きくて、分かりやすいように「便所」と記載している。中には、敷地内にある畑に出て、野菜づくりをしている利用者もいる。
		b	利用者の活動意欲を触発する馴染みの物品が、いつでも手に取れるように生活空間の中にさりげなく置かれている。(ほうき、裁縫道具、大工道具、園芸用品、趣味の品、新聞・雑誌、ポット、急須・湯飲み・お茶の道具等)	○	新聞、雑誌は自由に手に取れる場所に設置しているが、その他はスペースの問題や安全面を考慮し職員が管理している。				
29	鍵をかけないケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が、居室や日中にユニット(棟)の出入り口、玄関に鍵をかけることの弊害(鍵をかけられ出られない状態で暮らしていることの異常性、利用者にもたらす心理的不安や閉塞感・あきらめ・気力の喪失、家族や地域の人にもたらす印象のデメリット等)を理解し、日中は玄関に鍵をかけることなく済むように工夫している。(外出の察知、外出傾向の把握、近所の理解・協力の促進等)	○	鍵を掛けることの弊害は理解している。日中はどこも鍵はかけておらず、自由に入出入りできるようにしている。2階階段の欄は、転倒防止のため、鍵をかけている。	◎	◎	○	代表者と施設長、管理者、職員は、日中に居室やユニットの出入り口、玄関に鍵をかけることの弊害を理解している。玄関は、来訪者が来ると分かりやすいように、センサーチャイムが鳴るようになっており、コロナ禍においても、対応しやすくなっている。また、ユニットのキッチンから、職員は廊下まで見渡せないために、ミラーを設置するなどの工夫が行われている。また、夜間は防犯のため、19時から6時まで玄関の施錠をしている。
		b	鍵をかけない自由な暮らしについて家族の理解を図っている。安全を優先するために施錠を望む家族に対しては、自由の大切さと安全確保について話し合っている。	○	家族には契約時に説明し、理解を得ている。				
(4) 健康を維持するための支援									
30	日々の健康状態や病状の把握	a	職員は、利用者一人ひとりの病歴や現病、留意事項等について把握している。	○	24hシートや健康チェック表、日誌等で情報収集し、把握している。				
		b	職員は、利用者一人ひとりの身体状態の変化や異常のサインを早期に発見できるように注意しており、その変化やサインを記録に残している。	○	24hシートや健康チェック表、日誌等で情報収集し、把握している。				
		c	気になることがあれば看護職やかかりつけ医等にいつでも気軽に相談できる関係を築き、重度化の防止や適切な入院につなげる等の努力をしている。	○	主治医や事業所の看護師に相談しながら利用者個々に応じている。				
31	かかりつけ医等の受診支援	a	利用者一人ひとりのこれまでの受療状況を把握し、本人・家族が希望する医療機関や医師に受診できるよう支援している。	○	本人や家族に相談しながら医療機関や医師に受診できるよう支援している。	◎			
		b	本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している。	○	本人や家族に相談し、意向を伺いながら納得できる医療機関で、診療を受けられるよう支援している。				
		c	通院の仕方や受診結果の報告、結果に関する情報の伝達や共有のあり方等について、必要に応じて本人や家族等の合意を得られる話し合いを行っている。	○	必要時、家族にも通院に同席して頂いている。同席がない場合は結果を報告している。				

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
32	入退院時の医療機関との連携、協働	a	入院の際、特にストレスや負担を軽減できる内容を含む本人に関する情報提供を行っている。	○	入院の際は情報提供を行い、本人の状態を伝えている。				
		b	安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、日頃から病院関係者との情報交換や相談に努めている。	○	管理者、看護職員が主に病院関係者と連絡を取り合いながら、随時家族とも連携し、行っている。				
33	看護職との連携、協働	a	介護職は、日常の関わりの中で得た情報や気づきを職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談している。看護職の配置や訪問看護ステーション等との契約がない場合は、かかりつけ医や協力医療機関等に相談している。	○	介護職員は、日々の気づきや情報を、看護職員に伝え、看護職員より主治医に報告、相談を行っている。				
		b	看護職もしくは訪問看護師、協力医療機関等に、24時間いつでも気軽に相談できる体制がある。	○	施設の看護師、協力医には、いつでも気軽に連絡、相談ができる。				
		c	利用者の日頃の健康管理や状態変化に応じた支援が適切にできる体制を整えている。また、それにより早期発見・治療につなげている。	○	毎日健康チェック表にバイタルを測定と、排便の状態を記録し、確認することで、体調の変化や、早期発見ができ、治療に繋げることができる。食事量や排泄の確認などからも早期発見につながっている。				
34	服薬支援	a	職員は、利用者が使用する薬の目的や副作用、用法や用量について理解し、本人の状態の経過や変化などを記録し、家族や医師、看護職等に情報提供している。	○	受診記録や薬の説明書により、確認している。本人の状態の経過や変化などは24hシートや健康チェック表に記録、看護職員はそれを家族や、主治医に情報提供している。				
		b	利用者一人ひとりが医師の指示どおりに服薬できるよう支援し、飲み忘れや誤薬を防ぐ取り組みを行っている。	○	服薬管理は看護職員がしており、個々に準備をし、服薬チェック表に記入している。				
		c	服薬は本人の心身の安定につながっているのか、また、副作用(周辺症状の誘発、表情や活動の抑制、食欲の低下、便秘や下痢等)がないかの確認を日常的に行っている。	○	日々様子観察し、変化や異常があれば看護職員を通して主治医に相談している。				
35	重度化や終末期への支援	a	重度化した場合や終末期のあり方について、入居時、または状態変化の段階ごとに本人・家族等と話し合いを行い、その意向を確認しながら方針を共有している。	○	随時家族と相談しながら、終末期や延命治療などの方針を確認し職員間で共有している。				事業所には、「重度化した場合における対応に係る指針」「重度化及び看取りに関する指針」があり、家族等に対応できることの説明を行い、医療連携体制の同意を得ている。重度化や終末期の過ごし方について、医師から直接家族に状態を説明してもらうとともに、利用者や家族、医師、関係者で情報共有を行い、方針を共有している。また、24時間体制で医師との連携が取れているほか、代表者や施設長、管理者、看護師等との連絡体制も整備され、希望に応じて、積極的な看取り支援にも取り組んでおり、訪問調査月の前月にも、看取り支援を経験している。さらに、夜間急変時の対応は、法人の代表者や施設長等に連絡するほか、状況に応じて、家族や医師と連携を図れるようになっている。職員の聞き取りからは、「利用者や家族、職員が安心して、最期を過ごすことができた」などの話を聞くことができた。
		b	重度化、終末期のあり方について、本人・家族等だけでなく、職員、かかりつけ医・協力医療機関等関係者で話し合い、方針を共有している。	○	カンファレンスやかかりつけ医の往診等、家族や本人と共に今後について話し合い、方針を共有している。	◎		◎	
		c	管理者は、終末期の対応について、その時々職員の思いや力量を把握し、現状ではどこまでの支援ができるかの見極めを行っている。	○	カンファレンスを行い、介護職のできる事など具体的に話し合い、対応している。				
		d	本人や家族等に事業所の「できること・できないこと」や対応方針について十分な説明を行い、理解を得ている。	○	その都度話し合い、理解して頂いている。				
		e	重度や終末期の利用者が日々より良く暮らせるために、家族やかかりつけ医など医療関係者と連携を図りながらチームで支援していく体制を整えている。あるいは、今後の変化に備えて検討や準備を行っている。	○	協力医との連携はとれており、重度化や終末期に向けて随時連絡を取り、相談や支持を仰いでいる。				
		f	家族等への心理的支援を行っている。(心情の理解、家族間の事情の考慮、精神面での支え等)	△	声掛けやコミュニケーションを通して気持ちを聴けるよう掛けている。				
36	感染症予防と対応	a	職員は、感染症(ノロウイルス、インフルエンザ、白癬、疥癬、肝炎、MRSA等)や具体的な予防策、早期発見、早期対応策等について定期的に学んでいる。	△	定期的には学んでいないが、感染症が流行るころにミーティングなどで対応策は話し合っている。				
		b	感染症に対する予防や対応の取り決めがあり、万が一、感染症が発生した場合に速やかに手順にそった対応ができるよう日頃から訓練を行うなどして体制を整えている。	△	感染症対策のマニュアルは作成しているが、日頃からの訓練はできていない。				
		c	保健所や行政、医療機関、関連雑誌、インターネット等を通じて感染症に対する予防や対策、地域の感染症発生状況等の最新情報を入手し、取り入れ、随時対応している。	○	行政や医療機関、テレビや新聞などから情報を入手し、共有している。				
		d	職員は手洗いやうがいなど徹底して行っており、利用者や来訪者等についても清潔が保持できるよう支援している。	○	玄関にははくとすぐ、洗面所があり出勤した職員は手洗い、消毒を行いユニットに入っている。来訪者にも玄関で消毒をして頂き、清潔保持をおこなっている。				

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと	
II. 家族との支え合い										
37	本人をともに支え合う家族との関係づくりと支援	a	職員は、家族を支援される一方の立場におかず、喜怒哀楽をともにし、一緒に本人を支えていく関係を築いている。	○	利用者本人の近況をお伝えし、コミュニケーションを図るように意識している。				コロナ禍以前は、花見や敬老会などに合わせて、年2回家族会を実施し、家族同士の交流を図ることができていたが、現在は開催を自粛している。コロナ禍において、家族が来訪する機会が減少しているものの、ガラス越しやリモートの面会にも対応をしている。利用者の誕生日会などの際には、事業所の通信機器を活用して、家族に動画を送るなどの対応を行い、家族に喜ばれている。また、毎月のしおり便りの発行に合わせて、担当職員が利用者の近況報告を兼ねた手紙を添えて送付をしている。手紙に関しては、家族から、代表者や施設長、管理者に電話で、「ありがとうございます」などの連絡をもらうこともある。毎年4月のしおり便りには、職員の異動を含めた新たな職員体制の顔写真を掲載している。さらに、設備改修などの報告について、管理者は、「今後の検討課題である」と考えている。加えて、来訪時や電話連絡時を活用して、職員は利用者の様子を伝えて、家族から意見や要望を聞くよう努めている。	
		b	家族がホームでの活動に参加できるように、場面や機会を作っている。(食事づくり、散歩、外出、行事等、家族同士の交流)	△	コロナ以前は夏祭りや、認知症カフェ等、イベントの度招待していた。今はコロナのため制限しながら行が、中止している。	◎		○		
		c	家族が知りたいことや不安に感じていること等の具体的内容を把握して、家族の来訪時や定期的な報告などにより、利用者の暮らしぶりや日常の様子を具体的に伝えている。(「たより」の発行・送付、メール、行事等の録画、写真の送付等)	○	毎月、担当者が利用者の近況を書いて、手紙を送っている。また、広報でも直近の利用者様の様子を写真や文字にして掲載している。連絡をとる際には、利用者様の近況を伝え、家族の意見や要望も伺っている。	◎		○		
		d	これまでの本人と家族との関係の理解に努め、より良い関係を築いていけるように支援している。(認知症への理解、本人への理解、適切な接し方・対応についての説明や働きかけ、関係の再構築への支援等)	○	随時家族や本人から、話を聞き、本人と家族の関係について理解しており、よりよい関係が築けるよう働きかけている。					
		e	事業所の運営上の事柄や出来事について都度報告し、理解や協力を得るようにしている。(行事、設備改修、機器の導入、職員の異動・退職等)	△	職員の異動や退職等はお手紙に記載しているが、施設改修や機器の導入等は報告していない。	◎				○
		f	利用者一人ひとりに起こり得るリスクについて家族等に説明し、抑圧感のない暮らしを大切にしながら対応策を話し合っている。	○	入所時からリスクについては説明し、本人の意思を尊重したうえで対応策を提案している。					
		g	家族が、気がかりなことや、意見、希望を職員に気軽に伝えたり相談したりできるように、来訪時の声かけや定期的な連絡等を積極的に行うことで、居心地よく安心して過ごせるような雰囲気づくりや対応を行っている。(来やすい雰囲気、関係再構築の支援、湯茶の自由利用、居室への宿泊のしやすさ等)	△	話しやすい関係が持てるよう、雰囲気作りや声掛けなど意識しているが、現在はコロナ禍でコミュニケーションが取れていない。					○
38	契約に関する説明と納得	a	契約の締結、解約、内容の変更等の際は、具体的な説明を行い、理解、納得を得ている。(食費、光熱水費、その他の自己負担額、敷金設定の場合の償却、返済方法等)	◎	入所時に説明している。途中で変更があった場合には、書面にして説明し、理解、納得を得て、同意書にサインもいただいている					
		b	退居については、契約に基づくとともにその決定過程を明確にし、利用者や家族等に具体的な説明を行った上で、納得のいく退居先に移れるように支援している。退居事例がない場合は、その体制がある。	◎	有事には説明し、今後についての選択肢を提案している。					
III. 地域との支え合い										
39	地域とのつきあいやネットワークづくり ※文言の説明 地域、事業所が所在する市町の日常生活圏域、自治会エリア	a	地域の人に対して、事業所の設立段階から機会をつくり、事業所の目的や役割などを説明し、理解を図っている。	○	近隣には広報を配布したり、コロナ前には行事のお誘いにパンフレット等お届けしていた。		◎		コロナ禍において、事業所には面会などの制限が設けられ、地域との交流できる機会が減少している。コロナ禍においても、可能な地域の小学校や保育園との交流は継続しており、春には園児と玉ねぎの収穫をしたり、訪問調査月の10月には、芋掘りを利用者と一緒に行うことを予定している。令和4年の春には、地域住民を対象とした「認知症サポーター養成講座」を地区社協と協力して開催することもできた。また、近隣の住民には、しおり便りを持参するほか、食材の配達を依頼している商店に、事業所便りを掲示してもらうなど、事業所の経営や運営の理解促進に努めている。コロナ禍以前は、事業所で認知症カフェを開催して、地域住民に参加してもらったり、利用者と一緒に地域行事に参加したりすることもできていた。	
		b	事業所は、孤立することなく、利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、地域の人たちに対して日頃から関係を深める働きかけを行っている。(日常的なあいさつ、町内会・自治会への参加、地域の活動や行事への参加等)	○	コロナ前は、地域の清掃に参加したり、お祭りや、行事に声掛けし、関係作りをしていた。		△	○		
		c	利用者を見守ったり、支援してくれる地域の人たちが「増えている」。	△	見守ったり、支援してくれる人はいるが、限られた人達になっている。					
		d	地域の人が気軽に立ち寄り遊びに来たりしている。	◎	コロナ以前は夏祭りや認知症カフェに招待していた。風景画を描きに来る人もいた。					
		e	隣近所の人と気軽に声をかけ合ったり、気軽に立ち寄ってもらうなど、日常的なおつきあいをしている。	△	挨拶を交わす程度。日常的に立ち寄ることはない。					
		f	近隣の住民やボランティア等が、利用者の生活の拡がりや充実を図ることを支援してくれるよう働きかけを行っている。(日常的な活動の支援、遠出、行事等の支援)	○	ボランティア散髪に月1回来て頂き、散髪の支援を受けている。コロナ前はカラオケや、事演奏、笑いヨガ等、色々な働きかけをして頂いていた。					
		g	地域の人たちや周辺地域の諸施設からも協力を得て、安全で豊かな暮らしができるよう、日頃から理解を拡げる働きかけや関係を深める取り組みを行っている(公民館、商店・スーパー・コンビニ、飲食店、理美容店、福祉施設、交番、消防、文化・教育施設等)。	◎	ボランティア散髪に月1回来て頂き、散髪の支援を受けている。コロナ前はカラオケや、事演奏、笑いヨガ等、色々な働きかけをして頂いていた。年1回の消防署参加の避難訓練も見送られている。現在は、保育園児の訪問や、地域の商店の移動販売に来て頂いている。					

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
40	運営推進会議を活かした取り組み	a	運営推進会議には、毎回利用者や家族、地域の人の参加がある。	○	コロナ前は地域の人や家族、他施設からの参加があったが、コロナが流行してからは、資料を送付し、感想や意見など頂いている。	◎	/	○	コロナ禍において、運営推進会議は書面開催となっている。令和4年6月には、隣接するグループホームと合同で、約1年4か月ぶりに集合形式の会議を開催することができ、家族や地域住民、保育園、小学校、警察官、公民館、消防署、民生委員、地区社協、市担当者などと活発な意見交換を行うことができた。新たに、地域の消防団に会議の参加メンバーになってもらうことができたものの、地域の防災を話し合う機会までには至っていない。書面開催において、議事録を作成して市担当者には提出しているが、他の参加メンバーには、会議資料の送付のみに留まっているため、次回の会議資料等で、前回の会議報告の掲載を行うなど、議事録の周知も期待される。
		b	運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況(自己評価・外部評価の内容、目標達成計画の内容と取り組み状況等)について報告するとともに、会議で出された意見や提案等を活かした結果等も報告し、議事録を公表している。	○	利用者の日頃の活動報告や、ヒヤリハットの報告を行っている。また、外部評価の内容、目標達成計画の報告も行っている。運営推進会議は、感染予防の為、当面は書面での開催となっており、意見や提案は返送して頂いている。議事録については、市への提出はしている	/	◎	○	
		c	テーマに合わせて参加メンバーを増やしたり、メンバーが出席しやすい日程や時間帯について配慮・工夫をしている。	△	テーマに合わせてメンバーを調整していない。また、日程や時間帯もこちらで決めてお知らせしている。	/	/	○	
IV.より良い支援を行うための運営体制									
41	理念の共有と実践	a	地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、代表者、管理者、職員は、その理念について共通認識を持ち、日々の実践が理念に基づいたものになるよう日常的に取り組んでいる。	○	理念は職員が見えるところに掲示し、共有認識が持てるよう目標を立てて、日常の支援に取り組んでいる。	/	/	/	
		b	利用者、家族、地域の人たちにも、理念をわかりやすく伝えている。	○	地域に配布しり広報誌にも記している。また、ボランティアや、見学に来られた人には説明している。	○	○	/	
42	職員を育てる取り組み ※文言の説明 代表者：基本的には運営している法人の代表者であり、理事長や代表取締役が該当するが、法人の規模によって、理事長や代表取締役をその法人の地域密着型サービス部門の代表者として扱うのは合理的ではないと判断される場合、当該部門の責任者などを代表者として差し支えない。したがって、指定申請書に記載する代表者と異なることはありうる。	a	代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、計画的に法人内外の研修を受けられるよう取り組んでいる。	△	コロナウイルス感染回避のため、研修の参加及び開催は見送っていた。オンラインでの研修も検討したが、ハード面の問題で開催を見送った。	/	/	/	年1回、法人の代表者と施設長が、職員との個別面談を行い、意見や要望などの聞き取りをしている。職員は、有給休暇や希望休が取得できるほか、誕生月にはリフレッシュ休暇を取得できるようになっている。また、夜勤時の20時には、敷地内に住む施設長が事業所内の巡回を行い、個別に夜勤職員と会話する機会を設けられ、職員との話しやすい関係づくりに努めている。コロナ禍以前は、懇親会などの福利厚生を図ることもできていたものの、現在は開催を自粛している。
		b	管理者は、OJT(職場での実務を通して行う教育・訓練・学習)を計画的に行い、職員が働きながらスキルアップできるように取り組んでいる。	○	異動時のソフトの工夫や、各種委員会の引継ぎ等できる限りOJTを行うようにしている。	/	/	/	
		c	代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている。	○	年に1回面談を行い、近況を把握している。各種手当についても説明し、口取得を促している。	/	/	/	
		d	代表者は管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互研修などの活動を通して職員の意識を向上させていく取り組みをしている。(事業者団体や都道府県単位、市町単位の連絡会などへの加入・参加)	△	コロナウイルス感染回避のため、このような機会への参加は見送っている。代表者レベルでの取り組みは市の協力のもとオンラインで参加している。	/	/	/	
		e	代表者は、管理者や職員のストレスを軽減するための工夫や環境づくりに取り組んでいる。	○	年に1回面談を行い、近況を把握している。夜勤時のラウンドで、日頃から1対1のコミュニケーションを取る機会を作っている。	○	○	○	
43	虐待防止の徹底	a	代表者及び全ての職員は、高齢者虐待防止法について学び、虐待や不適切なケアに当たるのは具体的にどのような行為なのかを理解したうえで、これらが見逃ごされることがないように注意を払い、発見した場合の対応方法や手順についても理解している。	△	研修に参加した職員が、学んだことを全体の会合で伝えている。また、不適切なケアなどを発見した場合には、速やかに上司に報告し、解決に繋げている。	/	/	○	事業所内で、職員は虐待防止などの研修を受けて、具体的に虐待や不適切なケアに当たる行為を理解している。中には、「ちょっと待って」などの大きな声を出す職員が見られることもある。また、不適切なケアなどを発見した場合には、職員同士で注意し合うとともに、注意が難しい場合には主任や管理者に伝えて、該当職員に確認の上で、注意喚起をしている。
		b	管理者は、職員とともに日々のケアについて振り返ったり話し合ったりする機会や場をつくっている。	○	管理者は、朝の申し送りや、ユニット会に参加し、日々のケアについて話し合っている。	/	/	/	
		c	代表者、管理者は職員の疲労やストレスが利用者へのケアに影響していないか日常的に注意を払い、点検している。	○	現場に入り、日々の様子を観察し、ちょっとした変化に気をつけている。	/	/	/	
44	身体拘束をしないケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が「指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」や「緊急やむを得ない場合」とは何かについて正しく理解している。	○	その都度具体的な話し合いをし、理解するよう努めている。	/	/	/	
		b	どのようなことが身体拘束に当たるのか、利用者や現場の状況に照らし合わせて点検し、話し合う機会をつくっている。	△	申し送りやユニット会で話し合っている。身体拘束防止マニュアルを作成し、共有している。	/	/	/	
		c	家族等から拘束や施設長の要望があっても、その弊害について説明し、事業所が身体拘束を行わないケアの取り組みや工夫の具体的な内容を示し、話し合いを重ねながら理解を図っている。	△	家族の要望を理解した上で、拘束や施設長のことを説明し、できるだけ拘束しない支援方法を提案しながら、理解を図っている。	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
45	権利擁護に関する制度の活用	a	管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学び、それぞれの制度の違いや利点などを理解し、利用者や家族の現状を踏まえ、パンフレット等の情報提供や相談に乗る等の支援を行っている。	△	コロナ前は研修に参加し、理解に努めていた。また、成年後見人制度のテキストを見て、理解しようとしている職員もいる。家族への制度の情報提供は、施設長や管理者が相談に乗っている。				
		b	支援が必要な利用者が制度を利用できるよう、地域包括支援センターや専門機関(社会福祉協議会、後見センター、司法書士等)との連携体制を築いている。	△	実際に後見人制度を利用している利用者もあり、連携体制は築けている。				
46	急変や事故発生時の備え・事故防止の取り組み	a	怪我、骨折、発作、のど詰まり、意識不明等利用者の急変や事故発生時に備えて対応マニュアルを作成し、周知している。	△	目につくところに貼っているが、全ての事態に対応できるものではない。				
		b	全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている。	△	定期的に研修や訓練を行っている。(コロナ禍で、外部から講師を呼ぶのは、難しくなっている)				
		c	事故が発生した場合の事故報告書はもとより、事故の一手手前の事例についてもヒヤリハットにまとめ、職員間で検討するなど再発防止に努めている。	○	想定されるリスクや事故発生時には、申し送りやユニット会で検討し、再発防止に努めている。				
		d	利用者一人ひとりの状態から考えられるリスクや危険について検討し、事故防止に取り組んでいる。	○	事故当日の出動で話し合いがなされ、毎月のミーティングでも検討している。				
47	苦情への迅速な対応と改善の取り組み	a	苦情対応のマニュアルを作成し、職員はそれを理解し、適宜対応方法について検討している。	×	マニュアルはあるが、職員は行っていない。すべて上司に繋ぎ対応している。				
		b	利用者や家族、地域等から苦情が寄せられた場合には、速やかに手順に沿って対応している。また、必要と思われる場合には、市町にも相談・報告等している。	○	施設長や管理者が対応している。必要に応じ、市町に相談、報告している。				
		c	苦情に対しての対策案を検討して速やかに回答するとともに、サービス改善の経過や結果を伝え、納得を得ながら前向きな話し合いと関係づくりを行っている。	△	苦情や意見に対しては、早急に対応し、話し合いや報告を行いながら納得、理解していただけるよう取り組んでいる。				
48	運営に関する意見の反映	a	利用者や家族が意見や要望、苦情を伝えられる機会をつけている。(法人・事業所の相談窓口、運営推進会議、家族会、個別に訊く機会等)	△	コロナ前は、介護相談員が来訪し、利用者に意見を聞く機会があった。家族会も行ってた。(現在中止中)できる限り職員や管理者が伺い、要望など叶えられるよう努めている。運営推進会議は2年間書面開催となり、機会は減っている。	◎		○	日常生活の中で、職員は利用者から意見や要望を聞き、可能な範囲で柔軟に対応をしている。コロナ禍以前は、年2回家族会を開催して、職員は家族から意見を聞くことができていたが、現在は、来訪時や電話連絡時などを活用して、意見を聞くよう努めている。また、管理者等は、日々の支援の中で職員の顔色などの気になる場合には、その都度声をかけて意見を聞くとともに、相談に応じている。さらに、職員は代表者や施設長にも意見を伝えやすい環境が整えられているほか、月1回実施する全体ミーティングやユニット会の中でも、管理者等は職員に意見はないかの確認をしている。
		b	契約当初だけではなく、利用者・家族等が苦情や相談ができる公的な窓口の情報提供を適宜行っている。	△	特に窓口は作っておらず、いつでも苦情や相談は受け付けている。家族等が納得していただけない場合は、市町に相談に行っている。				
		c	代表者は、自ら現場に足を運ぶなどして職員の意見や要望・提案等を直接聞く機会をつけている。	○	日々の業務に加え、夜勤時にラウンドし意見や要望、提案をきいている。また、個人の面談も定期的に行っている。				
		d	管理者は、職員一人ひとりの意見や提案等を聴く機会を持ち、ともに利用者本位の支援をしていくための運営について検討している。	○	申し送りやミーティングだけでなく、日々意見や想いを伝えられる環境にある。				
49	サービス評価の取り組み	a	代表者、管理者、職員は、サービス評価の意義や目的を理解し、年1回以上全員で自己評価に取り組んでいる。	○	毎年自己評価を行い、サービス評価の意義や目的を理解するよう努めている。				外部評価の自己評価は、職員全員で取り組み、ユニット毎に管理者等が取りまとめて作成している。全体のミーティング等を活用して、サービスの評価結果や目標達成計画を職員に周知している。また、運営推進会議の参加メンバーや家族には、書面で評価結果や目標達成計画を送付して周知しているもの、目標達成への取り組みの途中経過までは報告できていない。コロナ禍の収束後には、取り組みの状況の確認などのモニターを、会議の参加メンバーや家族に協力を呼びかけて意見をもらったり、運営推進会議の議題に、サービス評価を取り上げて、話し合いをしたりするなど、職員間で話し合い、工夫された取り組みが行われることを期待したい。
		b	評価(自己・外部・家族・地域)の結果を踏まえて、事業所の現状や課題を明らかにするとともに、実現可能な目標達成計画を作成し、その達成に向けて事業所全体で取り組んでいる。	△	評価を通して、現状や課題は見えてくるが、それについて話し合う機会は少ない。また、目標達成計画を作成し、職員全員に周知しているが、達成に向けての取り組みは、コロナの関係もあり出来ていない。				
		c	評価結果と目標達成計画を市町、地域包括支援センター、運営推進会議メンバー、家族等に報告し、今後の取り組みのモニターをしてもらっている。	△	運営推進会議の際、メンバーに書面で報告し、家族にも書面を送付し、確認していただいている。	○	○	○	
		d	事業所内や運営推進会議等にて、目標達成計画に掲げた取り組みの成果を確認している。	△	取り組みの成果の確認はできていない。				

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
50	災害への備え	a	様々な災害の発生を想定した具体的な対応マニュアルを作成し、周知している。(火災、地震、津波、風水害、原子力災害等)	△	具体的なマニュアルは作成していないが、定期的に避難訓練を行い、意識づけしている。	/	/	/	敷地内にあるグループホームと合同で、様々な災害や場面を想定した避難訓練を実施している。地元消防団に、運営推進会議の資料を渡して意見を聞くなど、法人・事業所として、防災などを話し合う機会を設ける努力はしているものの、コロナ禍で話し合いまでに至っていない。また、平成30年7月豪雨災害では、大変な思いをした経験があるため、リスクや防災の委員会で話し合いや設備などの確認が行われている。今後は、運営推進会議の中で、消防署や警察、消防団、市担当者などを交えて、防災対策を話し合い、少しずつ地域住民との協力支援体制を構築できることを期待したい。
		b	作成したマニュアルに基づき、利用者が、安全かつ確実に避難できるように、さまざまな時間帯を想定した訓練を計画して行っている。	○	いろんなシチュエーションを想定し、定期的に訓練を行っている。	/	/	/	
		c	消火設備や避難経路、保管している非常用食料・備品・物品類の点検等を定期的に行っている。	○	防災リスク委員会により定期的に点検を行っている。	/	/	/	
		d	地域住民や消防署、近隣の他事業所等と日頃から連携を図り、合同の訓練や話し合う機会をつくるなど協力・支援体制を確保している。	×	運営推進会議のメンバーに、地区の消防団の方がおり、協力は仰げるが、コロナの関係で話し合う機会を持っていない。年に1度は消防署と連携し、訓練を行っているが、それも今はできていない。	○	×	○	
		e	災害時を想定した地域のネットワークづくりに参加したり、共同訓練を行うなど、地域の災害対策に取り組んでいる。(県・市町、自治会、消防、警察、医療機関、福祉施設、他事業所等)	×	地域のネットワークづくりや、共同訓練には参加できていない。しかし市との連携は図れており、災害時の受け入れができる福祉施設として対策に取り組んでいる。	/	/	/	
51	地域のケア拠点としての機能	a	事業所は、日々積み上げている認知症ケアの実践力を活かして地域に向けて情報発信したり、啓発活動等に取り組んでいる。(広報活動、介護教室等の開催、認知症サポーター養成研修や地域の研修・集まり等での講師や実践報告等)	×	地域に毎月広報誌を配布している。コロナの前までは、認知症カフェや、行事のお誘いをして、啓蒙活動していたが、現在はほとんどできていない。	/	/	/	法人・事業所として、しおり便りを活用して、相談できることを地域住民へ広報啓発をしているものの、市内中心部には市役所や地域包括支援センターもあり、ほとんど相談は寄せられない状況となっている。コロナ禍以前は、笑みちゃんカフェ(認知症カフェ)を開催して、地域住民などの相談に応じることもできていたが、現在は休止している。また、地区社協と合同で、「認知症サポーター養成研修」の実施に協力して、法人の代表者と施設長が講師を務めている。さらに、市行政や地域包括支援センターなどの会議や研修に参加する機会は少ないものの、連携を図ることはできている。
		b	地域の高齢者や認知症の人、その家族等への相談支援を行っている。	×	事業所見学や、電話での相談など、いつでも受け付けている。地域の店舗にも広報誌を貼ってもらい、情報を提供している。	/	×	△	
		c	地域の人たちが集う場所として事業所を解放、活用している。(サロン・カフェ・イベント等交流の場、趣味活動の場、地域の集まりの場等)	×	以前は事業所を開放し、認知症カフェを定期的に行ったり、ボランティアの人達も頻繁に来ていたが、今はコロナの為できていない。	/	/	/	
		d	介護人材やボランティアの養成など地域の人材育成や研修事業等の実習の受け入れに協力している。	×	要望があれば受け入れている。障害者支援センターからの実習など。	/	/	/	
		e	市町や地域包括支援センター、他の事業所、医療・福祉・教育等各関係機関との連携を密にし、地域活動を協働しながら行っている。(地域イベント、地域啓発、ボランティア活動等)	×	町内清掃や、公民館のイベント、保育園や学校の行事に参加していたが、コロナ感染予防のため、いまはできていない。	/	/	○	